# 研　究　紀　要

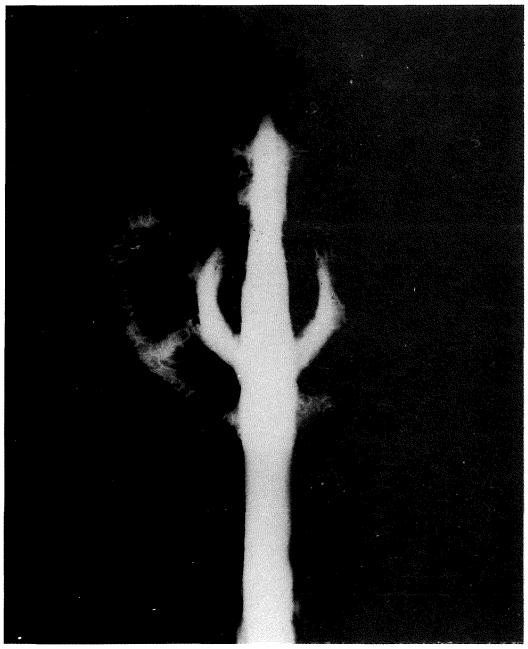
第 8 号

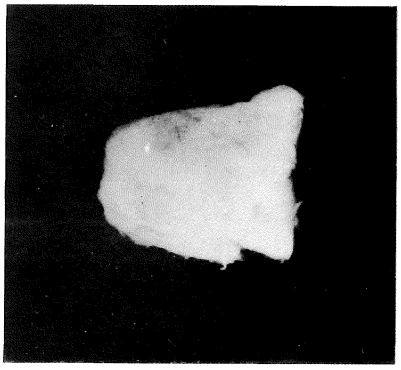
1 9 9 1

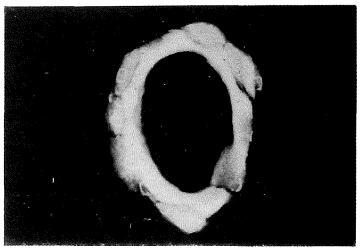
財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

# 巻頭図版

（瀧瀬論文付図）







熊谷市三ヶ尻林４号墳出土銀象嵌装大刀

上　出土状況　　下　Ｘ線写真（左 鐔　右上 鞘尻金具　右下 柄頭縁金具）

# 目　　次

序

方形周溝墓観察の一視点（１）
大屋　道則……1

溝中土壙小考
福田　　聖……9

関東地方東部における古墳出現期の様相Ⅰ
（古墳出現前夜の様相）　村田　健二……37

関東地方における埴輪祭式の受容
山本　　靖……65

埼玉県の拵付大刀
瀧瀬　芳之……101

「鬼高式土器」の外部
―古墳時代後期福島県域土器群と北部関東土器群の比較検討―
利根川章彦……127

古代武蔵の土師器理解のために
―北武蔵の７・８世紀の様相―　赤熊　浩一……165

# 関東地方における埴輪祭式の受容

山本　靖

## はじめに

埴輪祭式は古墳祭祀において重要な構成要素である(註１)。そのため埴輪研究は古墳文化研究のなかの重要な課題の一つといえる。埴輪祭式は吉備地方で弥生時代後期後葉に行われていた特殊器台形土器を用いた首長の埋葬儀礼が、古墳の成立と相呼応して発展・成立したと考えられている。そこで、「埴輪祭式の成立」と「古墳の出現」とは重大な関わりをもっている。

関東地方においては、畿内周辺地域にくらべて埴輪祭式の受容が遅れている。これにたいして、古墳時代後期には埴輪祭式が飛躍的に発展し、隆盛を誇っている。この時期には既に、畿内を中心とする西日本地域では埴輪祭式が衰退している。また東北地方においても同様に衰退の傾向にあることから、関東地方は埴輪祭式、延ては特異な古墳祭祀が行われていた地域といえよう。本稿では埴輪祭式の受容期の様相から、この特異な地域における古墳の成立構造の解明に努めていきたい。

## 1　埴輪祭式の成立

埴輪祭式の起源の研究は、近藤義郎・春成秀爾の「埴輪の起源」に端を発している。岡山県地方において弥生時代後期に出現し、墳墓に供献されている特殊器台形土器・壺形土器の型式学的変遷過程（立坂型→向木見型→宮山型→都月型）を明らかにし、「都月型の円筒形（器台形）埴輪が弥生時代後期の特殊器台形土器に由来することは確実となったが、また、都月型が底をぬいた壺形土器（壺形埴輪）をふくむいっぽう、朝顔形埴輪をふくまないという事実から、朝顔形埴輪は型式学的に見て円筒形埴輪に後出し、円筒形埴輪と壺の結合の産物としてつぎの段階にあらわれることを推定しうるようになった」としている。このことから、円筒埴輪の起源が吉備地方の弥生時代後期の墳墓に供献された特殊器台形土器に求められることとなった。そして特殊器台形土器からの離脱＝型式化が顕著で、器台そのものの形象物に転化した都月型の段階を円筒埴輪の成立としている。さらに、岡山県において特殊器台形土器から円筒埴輪への系統的な発展として辿れ、また特殊器台形土器の分布が岡山県内に限られ、その分布の認識が将来的に変動しないという前提から円筒埴輪の吉備発生説を唱えている（近藤・春成1967)。

その後、京都府元稲荷古墳・奈良県箸墓古墳・纒向遺跡など畿内中枢部において器台形円筒埴輪が検出され（近藤・都出1971、石野他1976)、埴輪の発生地に大きな疑問を投げかけることになった。近藤義郎は『日本考古学研究序説』に「埴輪の起源」を再録している。その追註において、「その後、都月型円筒埴輪（これは都月型器台形埴輪または特殊器台形埴輪と呼ぶほうが、より適切である）は、岡山市浦間茶臼山古墳、同網浜茶臼山古墳、同七つ丸古墳など岡山県下のいくつかの前方後円墳ないし前方後方墳から発見されたほか、奈良県箸墓古墳、京都府元稲荷古墳、兵庫県権現山51号墳にも知られるようになり、また裾部が特殊器台形土器の面影を残して外方に開き、その端部

が立ち上がりをみせるものや、特殊壺形土器特有な胴部の突帯をもつ特殊壺形埴輪が、奈良県の大型前方後円墳から発見されるなど、埴輪の成立地を吉備に限るという見解は改められなければならない。すなわち、吉備において成立展開した特殊器台形土器・特殊壺形土器が、畿内中枢部における前方後円墳の創出に当たり象徴化・形象化されて成立した可能性が高い」と訂正している（近藤1985）。

現在の埴輪研究において、「円筒埴輪」は「普通円筒埴輪」と「朝顔形埴輪」を含めたものとして把握されている(註２)。しかし「特殊器台形埴輪」・「器台形埴輪」・「特殊円筒埴輪」などと称されているものの定義は統一性に欠けている。この相違は特殊器台形土器からの型式学的な変遷過程のどの段階から埴輪の成立とするかという、埴輪祭式起源論そのものの再検討を迫っている。

稲村繁は「口縁部の形態、胴部の文様、透孔の配列等特殊器台の系譜を引くが、底部が円筒形になったもの」を特殊器台形埴輪、「特殊器台形埴輪の系譜をひくが、胴部の文様がなくなり、透孔の配列方式も単純化したもの」を特殊円筒埴輪と定義している。そして円筒埴輪とは特殊円筒埴輪・朝顔形埴輪・普通円筒埴輪が含まれたものと捉えている（稲村1984）。

古川登は「口頸部が屈曲してたちあがる二重口縁をも」ち、「特殊器台形埴輪の特徴を残すものがあるが、それとは規定しえないもの」を器台形埴輪、「口頸部が二重口縁を呈さ」ないものを普通円筒埴輪と定義している。また「都出氏が器台円筒と呼んだ、口頸部がきわめて短く一くの字状に外反するもの」も「器台として用いられるために作られたとは考えがたい」ことから普通円筒埴輪に含めて捉えている。さらに吉備・畿内地方で検出されている特殊器台形埴輪は特殊器台形土器と同じ吉備地方の足守川流域の胎土が使用され（奥田他1984）、供献的に置かれた出土状況から、特殊器台形埴輪を特殊器台形土器の一型式として把握している（古川1988、註３）。

特殊器台形土器から円筒埴輪への型式学的変遷過程において、最下段（底部）が特殊器台形土器的な有段のものから円筒状への変化、また特殊器台形土器的な文様の消失に画期が認められよう。墳丘への樹立方法においては、最下段が円筒状であれば埋設され、特殊器台形土器的な場合には据え置かれたものと考えられる。安易に動かすことができる「据え置く」という行為と、固定する「埋置」という行為には一つの飛躍が存在している。また文様の消失は「弥生時代的な文様からの脱却」という飛躍がある。さらに複雑な文様を施文しないことによって、製作技術の単純化、製作工程・製作期間の短縮に繋る。そして大量生産が可能となり、墳丘への多量配列の需要に応えることができる。元稲荷古墳から器台形円筒埴輪が検出されたことから、都出比呂志は円筒埴輪を普通円筒と器台円筒とに分類し、両者を時間的前後関係としてではなく、セット関係として理解している。そして「普通円筒は、多量に配列されることを契機に発生する」と指摘している（近藤・都出1971）。これらのことから、多量配列の段階を埴輪祭式の成立として捉えられよう。この仮定から、円筒埴輪には普通円筒埴輪・器台形埴輪・朝顔形埴輪を含めた総称として考えていきたい。しかし、これはあくまでも仮定であり、今後、改めて埴輪祭式の成立を検討し、この問題を明確にしていきたい。

## 2　埴輪の編年研究と関東地方における埴輪祭式受容期の設定

近藤義郎・春成秀爾の「埴輪の起源」は、その後の埴輪研究に多大な影響を与えている。なかで

も円筒埴輪の編年研究は飛躍的な進展をみせている。

編年研究の先駆として、都出比呂志が京都府寺戸大塚古墳から検出された円筒埴輪の編年的位置付けを行ったことがあげられる。都出は器面調整に着目して、3段階に分類している（近藤・都出1971）。

続いて編年研究に取り組んだのは、川西宏幸である。川西は都出と同様に器面調整に着目し、さらに発展させている。まず外面調整を突帯貼付前の調整（第一次外面調整）とそれ以後の調整（第二次外面調整）に分割し、また都出の第2段階にあたる第二次外面調整横ハケメを「一定間隔で止める横ハケメ」と「止めない横ハケメ」があることに注目している。さらに器面に付着している黒斑の有無が焼成技法の差によるものとしている。これらの点から、畿内の円筒埴輪を4時期に区分している（川西1973）。

初めて全国的な編年を行ったのが春成秀爾である。春成は5期編成を行い、その1期には都月型を比定している（春成1977）。

改めて、川西宏幸は畿内山城地域の編年を基礎として、全国編年を試みている。先の編年案をさらに発展させ、器面調整・底部調整・タガ・スカシ孔・焼成技法（黒斑の有無）の特徴から5期に編年している。特に春成編年Ⅰ期の都月型段階を埴輪祭式成立以前のものとして捉えており、注目される。さらにⅠ～Ⅳ期は副葬品の組み合わせ、Ⅴ期は伴出する須恵器の年代観によって実年代を比定している（川西1978）。川西編年はその後の埴輪研究への影響が強く、全国的にはその大筋が採用されている。しかし、一方では各地域ごとの細分が必要となってきている。特に関東地方においては、川西編年Ⅴ期の衰退期に埴輪祭式が盛行しており、地域の研究者によって詳細な編年研究が進められている。さらに川西編年には多くの疑問・批判が投げかけられている。例えば、橋本博文は「Ⅰ期の埴輪の成立の問題、同一古墳のなかでのバラエティーの解釈、古い技法の残存の問題、埴輪生産体制のとらえ方」などに疑問を提示している（橋本1981）。都出比呂志は、焼成技法のみが異なるⅢ期とⅣ期がある期間併存するとしたことに、「『期』が併存するということじたい、考古学的に適切な表現ではない」と批判している。また実年代の比定の重要な根拠としている小林行雄説（小林1965）の年代決定における手続きにも疑問を抱いている（都出1982）。

川西宏幸が山城地域の編年を基礎としているのにたいして、畿内政権の中枢部と考えられる大和盆地内に資料を限定して編年研究を行っているのが赤塚次郎である。赤塚はⅢ期8段階編年を試み、Ⅰ期を外面調整に技法の多様性が認められる時期、Ⅱ期を画一的な調整方式が忠実に使用される時期、Ⅲ期をこの技法が崩壊する時期としている。さらに埴輪生産体制の復元によって、この編年案を強化している（赤塚1979）。

都出比呂志は埴輪の編年を「一古墳から出土した埴輪の形態や製作技法の組み合わせをもとに『古墳埴輪様式』を設定し、この様式の新古を比較するという方法」で行っている。「古墳埴輪様式」の類似するものを「大様式」とし、3つの大様式に分類している。「A様式」は朝顔形円筒埴輪が未成立の段階で、「壺と器台とが別々に形象された埴輪群（A1）」と「壺形埴輪のみのもの（A2）」がある。「B様式」は朝顔形円筒埴輪の成立とタテ方向のハケメ技法、「C様式」は朝顔形円筒埴輪の型式化の進行と横方向のハケメ調整の出現を特徴としている。そして「A様式」→「B様式」

第1表　円筒埴輪編年表

| | 春成(1977) | 川西(1978) | 赤塚(1979) | 都出(1979) |
|---|---|---|---|---|
| 3C.末～4C.初 | I | | | A |
| | | | I－1 | |
| 4C.中～4C.後半 | II | I | I－2 | B |
| | | II | I－3 | C |
| 4C.末～5C.前半 | III | III | II－1 | |
| 5C.後半～5C.末 | IV | IV | II－2 | |
| | | | II－3 | |
| 5C.末～6C.中葉 | V | V | III－1 | |
| | | | III－2 | |

橋本博文(1980)より転載

→「C様式」と推移するものとして捉えている。また横方向のハケメ調整を「円筒埴輪に、より適合した技法」と評価している（都出1979）。

春成・川西・赤塚・都出の編年案の対応関係は第1表に示されている（橋本1980年）。川西案では朝顔形埴輪・形象埴輪が未成立な段階が編年に加えられていない。川西は「埴輪とは円筒埴輪と形象埴輪との総称であり、それはあくまで実用を失った仮器の類であると考える。したがって、かりに壺や器台が墳丘を囲繞していたとしても、形象埴輪の有無が定かでなく、また壺を器台に載せて土器としての用途をなお残すものを、埴輪に包括するには避けておきたいと思う。それでもあえて埴輪に入れようとする場合には、埴輪の定義の変更からはじめなければならないが、そこまでの変更の必要は認めていない」と見解を述べている（川西1988）。

近年、形象埴輪の編年作業も進んできている。高橋克壽が器財埴輪（高橋1988）、田中秀和・松木武彦が蓋形埴輪（田中1988、松木1990）、若松良一が人物埴輪（若松他1987）について行っている。

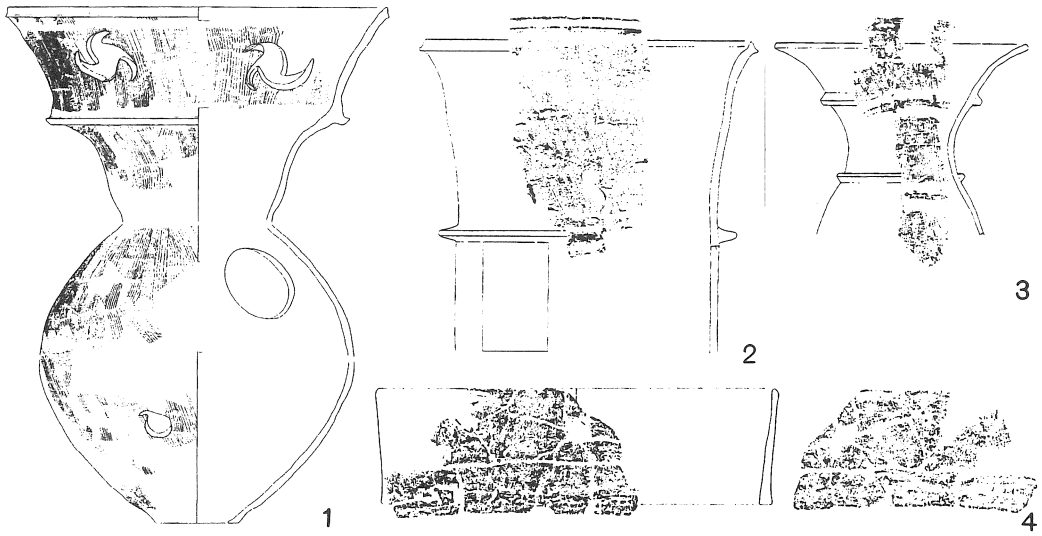
関東地方においては畿内周辺地域にくらべて、古墳の成立とともに、埴輪祭式の成立・受容が遅れている。関東地方の埴輪祭式は川西宏幸が指摘しているように、畿内からの一方的な影響のもとに成立し（川西1978）、独自に創出されたものではない。川西編年のIII期は、古墳の副葬品や埴輪の特徴から画期として捉えられている。副葬品においては、碧玉製品・滑石製品の減少、銅製品の消失、さらに三角板革綴甲冑・鋲留式甲冑の出現などがあげられる。円筒埴輪の特徴においては、内面ケズリ調整の消失、いわゆるB種ヨコハケ(註4)・円形スカシ孔への画一化、突帯断面の稜の消失などの変化が認められている。このことから、本稿では川西編年I・II期、都出編年のC様式以前の段階を埴輪祭式の受容期として捉えていく。この段階は都出比呂志・川西宏幸が古墳時代を三期区分している前期に相当している（都出1979、川西1981・1988、註5）。

## 3　関東周辺地域における埴輪祭式の受容

関東周辺地域において受容期の埴輪祭式は、山梨県の甲府盆地地域、静岡県の遠江地域、長野県の善光寺平地域に確認されている。

### (1)　山梨県甲府盆地における埴輪祭式の受容

山梨県甲府盆地において最古とされている古墳は中道町小平沢古墳（前方後方墳・45m）である。木棺直葬の埋葬施設で、斜縁式二神二獣鏡が検出されている。出土したS字状口縁台付甕形土器か




第１図　中道銚子塚古墳（1/10）

ら４世紀中葉の築造と考えられており、埴輪祭式は認められていない。

甲府盆地では小平沢古墳に後続する中道町銚子塚古墳（前方後円墳・169ｍ）において、埴輪祭式が受容されている（橋本1980、坂本1986・1987・1988）。中道銚子塚古墳は都出比呂志が提唱する前方後円墳成立の３要素（墳丘の三段築成法、北頭位埋葬、施朱密封）をすべて備えている古墳である（都出1991）。また副葬品は畿内的な色彩が強く、岡山県備前車塚古墳と同笵関係にある三角縁神人車馬鏡が存在している。検出されている埴輪には、壺形埴輪、円筒埴輪（器台形埴輪・普通円筒埴輪・朝顔形埴輪）、形象埴輪（囲形埴輪）がみられる。壺形埴輪は伊勢型二重口縁壺形土器のⅢ～Ⅳ期の段階（４世紀中～後半）との類似が指摘されている。スカシ孔は口縁部に三つ巴形４孔、胴部上半に円形もしくは巴形２孔、胴部下半に小型の巴形１孔穿孔されている。円筒埴輪は外面二次調整タテハケを主体として、僅かにＡ種ヨコハケも施されている。すべて貼付突帯で、接着面積を増加させるための投錨技法が認められる。スカシ孔は巴形・三角形・方形が、突帯間に３孔以上穿孔されている。囲形埴輪はくびれ部から出土し、器面調整は円筒埴輪と同様である。器面には黒斑が認められる。また周溝内から用途不明の木製品が検出されており、奈良県石見遺跡・京都府今里車塚古墳などから出土している形象埴輪的木製品との関連が注目される（註６）。

甲府盆地において中道銚子塚古墳のほかに、中道銚子塚古墳の前方部前面に位置している中道町丸山塚古墳（円墳 72ｍ）と八代町銚子塚古墳（前方後円墳・84ｍ）に認められている（橋本1980・坂本1986・1988）。丸山塚古墳・八代銚子塚古墳の円筒埴輪（器台形埴輪・普通円筒埴輪）は中道銚子塚古墳のものと器面調整・スカシ孔・焼成が類似しているものの、突帯の突出度が弱い。また突出部内面には、突帯貼付時に内側から押えたために付いた２条のヨコナデが認められる。中道銚子塚古墳では突帯部内面の２条のヨコナデは丁寧にハケによって消されている。丸山塚古墳からは松木編年第Ⅰ形式ｂ類に比定される蓋形埴輪も検出されている。丸山塚古墳・八代銚子塚古墳の埴輪は中道銚子塚古墳のものとくらべて、突帯・内面調整に退化傾向が窺われる。中道銚子塚古墳は

外面調整にA種ヨコハケが施されていることから川西宏幸はII期に比定し、二次タテハケは古い特徴の残存として捉えている（川西1988）。しかしA種ヨコハケが認められているものの二次タテハケにくらべて非常に客体的であることから、むしろ川西編年I期からII期への過渡期的段階のものとして捉えたい。そして、その特徴を継承して丸山塚古墳・八代銚子塚古墳でも同様な埴輪が製作されたものと想定したい。丸山塚古墳は中道銚子塚古墳に近接して築造され、八代銚子塚古墳は中道銚子塚古墳の1/2の企画によって構築されている。このことから両者の被葬者と中道銚子塚古墳の被葬者との密接な関係が窺われ、墳丘規模から従属的な関係が推定される。

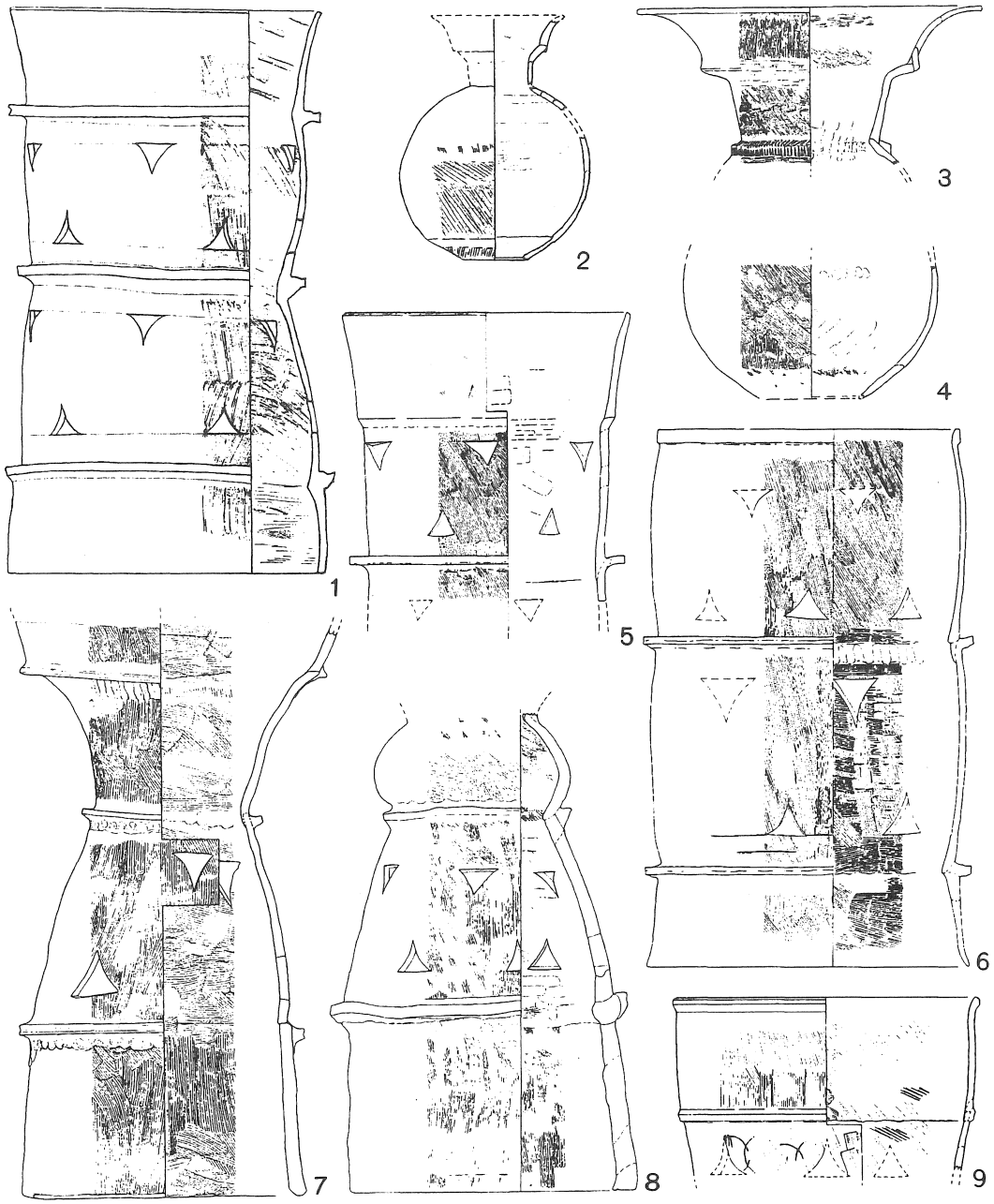
甲府盆地には中道銚子塚古墳と時期・水系を同じくして、埴輪を受容していない中道町大丸山古墳（前方後円墳・99mか120m）が築造されている。埋葬施設は組合式石棺状の上に竪穴式石室が存在する二重構造をもっている。岐阜県打越古墳・静岡県寺谷銚子塚古墳と同笵関係にある舶載三角縁三神三獣鏡と、同笵鏡の配布中枢とされる京都府椿井大塚山古墳と、仿製鏡の配布中枢とされる大阪府紫金山古墳のみで知られている竪矧板革綴短甲が検出されている。時期・墳形を同じくする中道銚子塚古墳と大丸山古墳の間には、埴輪祭式の有無という古墳祭祀の決定的な差異が存在している。中道銚子塚古墳が備前車塚古墳との同笵鏡、大丸山古墳が椿井大塚山古墳・紫金山古墳のみで検出されている竪矧板革綴短甲を副葬していることから、それぞれの首長同志の関連が想定される。椿井大塚山古墳と備前車塚古墳は同笵鏡配布の2大センターとされ、この違いが関連する中道銚子塚古墳と大丸山古墳の埴輪祭式の受容に大きな影響を与えたものと理解することも可能であろう。

**(2) 静岡県遠江地域における埴輪祭式の受容**

静岡県遠江地域は、弥生時代後期後半には天竜川を境にして2つの文化圏が存在している。天竜川以西は畿内の土器様式との関連が深い欠山式文化圏、天竜川以東は南関東の土器様式に繋る菊川式文化圏である。天竜川以西の出現期の古墳は、4世紀中葉に引佐町北岡大塚古墳（前方後方墳・47m）が都田川流域に築造されている。これに併行して天竜川東岸にも磐田市小銚子塚古墳（前方後方墳・47m）が築かれている。続いて西岸には浜北市赤門上古墳（前方後円墳・57m、同笵鏡出土）、東岸には小銚子塚古墳に隣接して磐田市寺谷銚子塚古墳（前方後円墳・112m、同笵鏡出土）、下流域には磐田市庚申塚古墳（前方後円墳・83m）の3基の前方後円墳が造営されている（中嶋1990）。なかでも寺谷銚子塚古墳は小銚子塚古墳に直接繋る首長墓である。これらの前方後方墳・前方後円墳には埴輪祭式が認められていない。

静岡県遠江地域で受容期の埴輪祭式が確認されているのは天竜川東岸の太田川流域に位置している磐田市松林山古墳（前方後円墳・116.4m）である（後藤1939）。松林山古墳からは普通円筒埴輪と朝顔形埴輪が検出されている。外面には一次調整のみのA種ヨコハケと二次調整のタテハケが施され、内面調整はハケが主体である。貼付突帯の突出度は強く、投錨技法はみられない。スカシ孔は三角形・円形・巴形のものが、突帯間に2孔穿たれている。器面には黒斑が存在している(註7)。円筒埴輪の特徴は、川西編年II期に比定される。副葬品の組み合わせや円筒埴輪の特徴から、松林山古墳は赤門上古墳・寺谷銚子塚古墳・庚申塚古墳とほぼ併行して築造されている。

松林山古墳の築造された太田川上流域には先行もしくは併行する磐田市新豊院山墳墓群が形成され、なかでも1号墳（約33.5m）・2号墳（34.3m）は前方後円形の墳墓である。しかし地理的に




第２図　森将軍塚古墳（1/10）

見て、松林山古墳に直接繋る首長墓としては捉えがたい。このことから、松林山古墳が太田川下流域に突如として出現した観がある。松林山古墳には長軸を南北方向にとる竪穴式石室が採用されており、畿内的な埋葬施設といえる。これにたいして、赤門上古墳が木棺直葬、新豊院山２号墳・寺谷銚子塚古墳（推定）が礫粘土槨である。礫粘土槨は新豊院山２号墳に先行する低墳丘墓の竹之内１号墓・新豊院山３号墓で認められていることから、在地的な埋葬施設といえよう。また松林山古

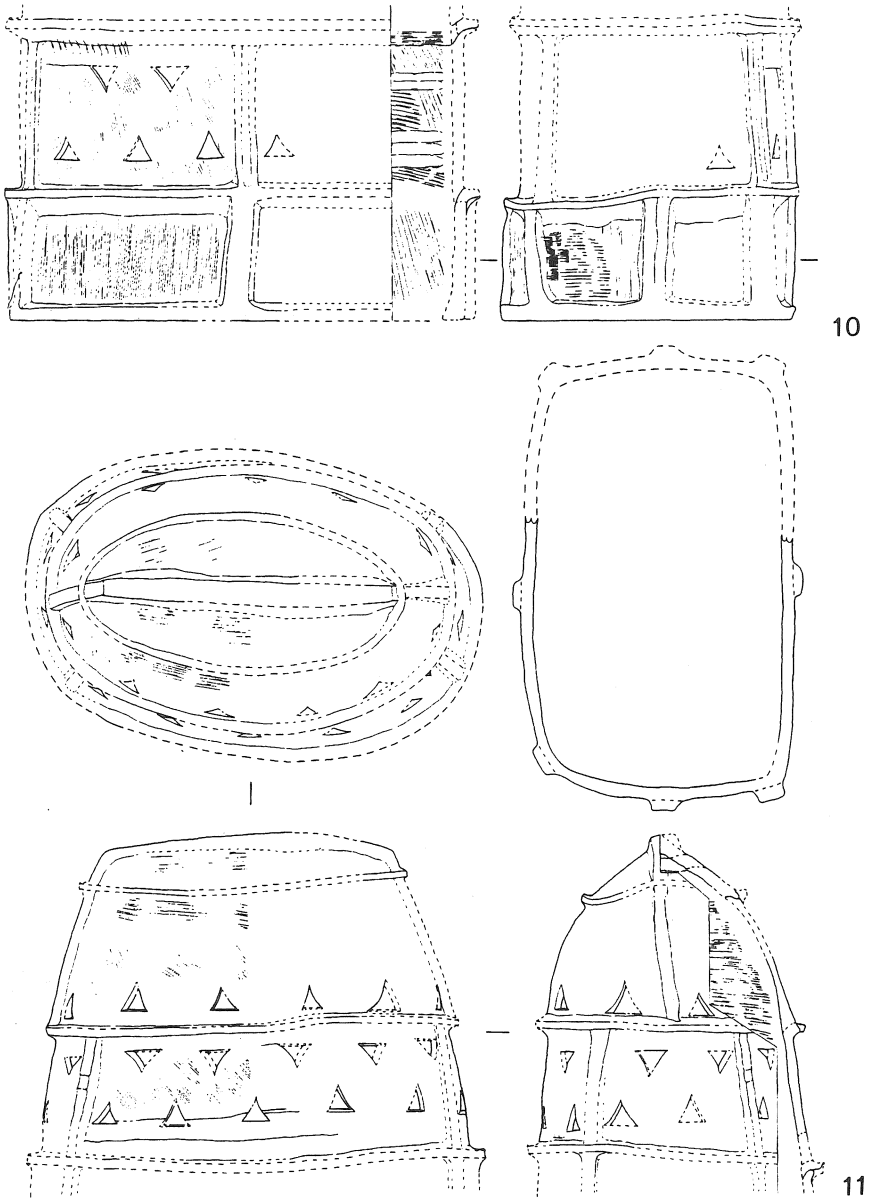
墳は副葬品においても、ほかの前方後円墳よりも群を抜いている。

天竜川・太田川下流域は東海道ルートにおける交通の要所であり、加えて東国文化圏への入り口にあたる地域である。この地に築造年代・墳丘規模を同じくする、松林山古墳と寺谷銚子塚古墳が築造されている。しかし両者には埴輪祭式の有無という古墳祭祀の決定的な差異が存在している。この関係は甲府盆地の中道銚子塚古墳と大丸山古墳の関係と近似している。松林山古墳は中道銚子塚古墳と副葬品の組み合わせが類似していることを指摘されており、一方、寺谷銚子塚古墳は大丸山古墳と同笵関係にある舶載三角縁神獣鏡が存在している。松林山古墳において備前車塚古墳との同笵鏡が知られず、また寺谷銚子塚古墳・大丸山古墳の同笵鏡（岐阜県坂尻古墳とも同笵関係にある）が椿井大塚山古墳との同笵関係が判明していないために論拠は薄いものの、遠江地域においても埴輪祭式の受容に同笵鏡配布センターの椿井大塚山古墳と備前車塚古墳との結び付きによって左右されている可能性がある。また甲府盆地への古墳伝播経路の一つとして、天竜川を遡上し、伊那谷・諏訪湖を経由して甲府盆地に至るルートが想定されている（小林1986）。このルートを想定した場合、遠江地域は東海道ルートのみならず、東山道ルートにおいても交通の要所といえる。松林山古墳は前代から直接繋るような首長墓が認められていないにもかかわらず、突如として、在地系列の大首長墓の寺谷銚子塚古墳に優る大首長墓が築造されている。これらのことから、松林山古墳の大首長は東海道ルート・東山道ルートの交通の要所の掌握と、在地系列の大首長の牽制という役目を担ったことが想定され、この背景には、畿内政権の東国進出政策が大いに関わっていたことは間違いないであろう。おそらくは、松林山古墳の首長が畿内政権を後盾に、大首長へと急成長を遂げたものと捉えたい。

### (3) 長野県善光寺平地域における埴輪祭式の受容

長野県域の出現期の古墳として、松本平の松本市弘法山古墳（前方後方墳・66m）、佐久平の佐久市瀧の峯2号墓（前方後方形周溝墓・18m）、上田盆地の上田市大蔵京古墳（方墳・35m）、善光寺平の長野市川柳姫塚古墳（前方後方墳・32m）、長野市蟹沢古墳（前方後方墳・40m）、飯山市勘介山古墳（前方後方墳・35m）があげられる。いずれも前方後方形の墳墓で、埴輪祭式は認められない。松本平・佐久平の古墳では東海西部系土器群の出土が知られ、古墳の出現に東海西部地域が関連していたことが想定されている。これにたいして、善光寺平の前方後方墳は北陸地方の影響下に成立したとの説がある（甘粕1986）。

続いて、善光寺平地域に前方後円墳の更埴市森将軍塚古墳（98m）が築造され、同時に埴輪祭式が受容されている（八幡・米山・岩崎1973、立木1974、更埴市教育委員会1981～1988）。森将軍塚古墳の埋葬施設は後円部墳頂の竪穴式石室を中心として、前方部墳頂・墳麓部に竪穴式石室2基、組合式箱形石棺60基、埴輪棺11基、土壙墓1基、集石埋葬遺構2基（註8）が検出され、また隣接して小円墳群が存在している。埴輪は壺形埴輪、円筒埴輪（器台形埴輪・普通円筒埴輪・朝顔形埴輪）、異形埴輪（家形埴輪？）が検出されている。また調整技法などから、墳丘上の埴輪と埴輪棺に使用されている埴輪はほぼ同時期の所産と思われる。しかし両者の器高・口径に若干の差異が認められることから、埴輪棺の埴輪は古墳からの転用ではなく、「埴輪棺」として製作された可能性が高い。円筒埴輪の個々の器形はバラエティに富み、裾広がりの器形のものと、第2条突帯部（註9）がく




第3図　森将軍塚古墳（1/10）

びれるものもみられる。三角形のスカシ孔は突帯間に12孔穿たれ、千鳥状に配置されている。突帯は貼付突帯のほかに、擬口縁型と粘土紐組合型の3種類ある（註10）。器種による明確な使い分けは認められず、突出度は強い。普通円筒埴輪では第1条突帯・第2条突帯に擬口縁型・粘土紐組合型が多く、第3条突帯はすべて貼付突帯である。朝顔形埴輪は第1条突帯に粘土紐組合型が多く、頚部はすべて貼付突帯である。外面調整には二次タテ・ナナメハケ、ナデが施され、ごく僅かにA種ヨコハケが存在している。器面には黒斑が認められる。埴輪の特徴から川西編年Ⅰ期末もしくはⅡ期への過渡期のものであろう。

森将軍塚古墳の円筒埴輪の裾広がりの器形は「山陰型」特殊器台形土器に類似している。甘粕健の説に従って、善光寺平の出現期古墳の成立が北陸地方の影響によるものと仮定すれば、日本海伝いに北陸地方を経由して山陰の形態が波及してきたものと捉えることができる。また擬口縁技法は長野市川柳将軍塚古墳陪冢墳の埴輪棺（川西編年Ⅱ期）、上田盆地の東部町中曽根親王塚古墳（方墳・50m）、伊那谷の飯田市新井原2号墳（円墳・30m）に認められている。中曽根親王塚古墳は5世紀後半に位置付けられ、新井原2号墳は川西編年Ⅲ期に相当する5世紀中ごろに比定されている。擬口縁技法はほかに茨城県の長辺寺山古墳で知られているにすぎず、点的な分布を示すのみである。善光寺平においても、後続する首長墓には継承されていない。

松本平・佐久平には森将軍塚古墳に併行する大型前方後円墳が認められず、善光寺平の首長である森将軍塚古墳の被葬者は信濃地域の大首長として君臨していた可能性が予想される。大首長として畿内地方の古墳祭祀の重要な構成要素である埴輪祭式を受容しているが、その器形は山陰型特殊器台形土器に類似している。また森将軍塚古墳は北陸地方の影響が指摘されている姫塚古墳の系列にある首長と想定されており（岩崎1989）、日本海経路の文化と畿内の古墳文化が融合された結果が、森将軍塚古墳の特異な埴輪に象徴されていると捉えることもできよう。畿内の勢力と日本海勢力を背景に、信濃地域の大首長として急成長を遂げた可能性がある。しかしその一方においては、墳丘上・墳麓の小型埋葬施設、周辺の小円墳群などの集団墓的なあり方は特異である。岩崎卓也は小型埋葬施設に葬られた人々が森将軍塚古墳の被葬者の近縁者で、首長と民衆との間に共同体的な関係が残存し、階級的な対立関係が存在していなかったものと推理している（岩崎1990）。このように考えるならば、森将軍塚古墳の首長としての地位は非常に曖昧なものであり、その曖昧さから畿内的な形態の埴輪が製作できなかったともいえる。全国各地ではほぼ画一的な形態の埴輪が検出されていることから、埴輪祭式の波及に伴って製作技術も伝播したものと考えられる。製作技術の伝播には、製作者集団の移動（派遣？）を想定することができる。森将軍塚古墳の場合は首長の地位が曖昧であったがために埴輪祭式の作法は伝わったものの、製作者集団の移動まではままならずに、在地の土器製作者が独自に埴輪を製作せざるをえなかったものと考えることも可能である。また善光寺平は関東地方・北陸地方へ通じる交通の要所であり、畿内政権にとっては東国進出への重要な拠点でもある。甘粕健・久保哲三は「長野県の古い様式の古墳として善光寺平の篠井町将軍塚があるにすぎないのは、この地方が大和勢力発展の初期の段階で、広大な平野をもつ越後や関東へ達するための通路としての役割しかはたさなかったためとおもわれる。いいかえれば東山道そのものが、毛野の沃野に達することを重要な目標とし、そのために東国経略の拠点勢力を背景として篠井町将軍塚がいとなまれたのであろう」と評価している（甘粕・久保1966）。この説を援用するならば、この地域が畿内政権による東国進出への単なる通り道として軽視され、森将軍塚古墳では畿内的な埴輪の製作技術が伝わらずに特異な埴輪が製作され、さらには歪な形状を成す前方後円墳が築造されたことが想像される。在地の土器製作者集団が独自に製作した埴輪であったがために、その製作技法が継承されなかったものと考えることもできよう。

## 4　関東地方における埴輪祭式の受容

関東地方において受容期の埴輪祭式、群馬県・栃木県の毛野地域、茨城県の常陸地域、そして南関東の相模川流域に認められている。

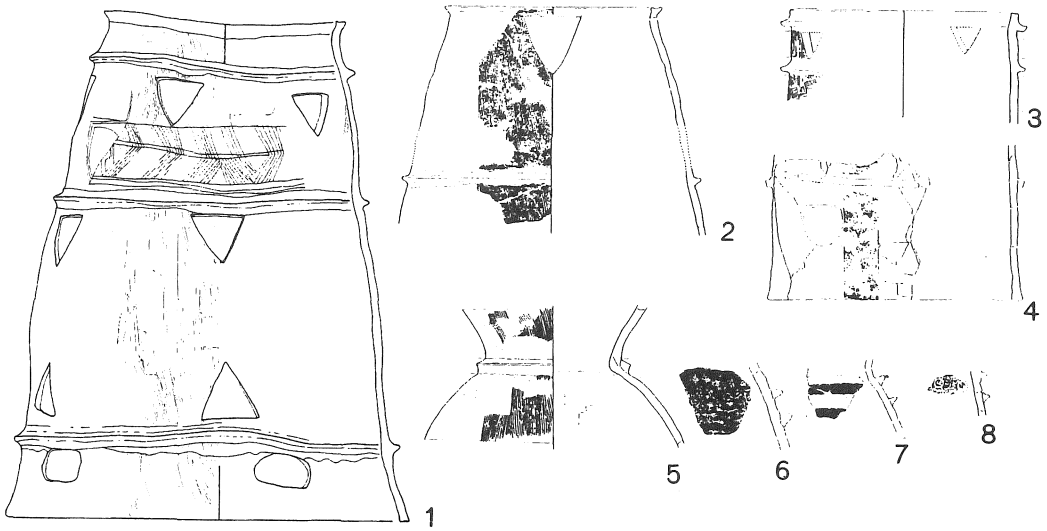
### (1)　毛野地域における埴輪祭式の受容

毛野地域の出現期の古墳は各水系単位に形成され、各水系単位を掌握していた首長の存在が想定されている。その様相は築造された古墳の墳形から２つの地域に分割される。その一つは前方後方墳・前方後円墳・円墳が築造されている地域で、現在の群馬県域に相当する。この地域は古墳の分布から前橋市・高崎市周辺地域（群馬県南西部）と太田市を中心とした地域（群馬県南東部）に分けることができ、群馬県南東部には渡良瀬川以東の栃木県域の一部が含まれている。もう一方は前方後方墳と方墳が築かれている地域で、栃木県域にあたる。この地域も古墳の分布から栃木県南部と北部に二分される。毛野地域は現在の群馬県・栃木県域を含めた広範な地域である。国造本紀では仁徳紀に上毛野・下毛野に分けられたものとされ、また久保哲三は大型古墳の分布と消長から、６世紀前半に分割されたものと推定している（久保1986)。しかし出現期の古墳は、渡瀬川を境にして墳形の異なるものが築造されている。栃木県域においても古墳の分布は南北それぞれに集中し、那珂川の支流の荒川付近を境界としている。これらのことから、古墳出現期には既に上毛野・下毛野・那須という地域的独自性が存在していたものと思われる（註11)。

上毛野南西部地域の出現期の古墳は、河川流域に認められている。鏑川流域には富岡市北山茶臼山古墳（円墳・40ｍ）・吉井町恩行寺古墳（円墳・45ｍ)、神流川流域には藤岡市三本木古墳（円墳？)、烏川の中流域には榛名町本郷大塚古墳（円墳・約45ｍ）・高崎市乗附長坂古墳（円墳)、下流域には玉村町の軍配山古墳（円墳・40ｍ）・玉村町芝根７号墳（前方後円墳・約50ｍ）・玉村町箱石浅間山古墳（八角形墳・約30ｍ)、井野川流域には高崎市柴崎蟹沢古墳（円墳・12ｍ）・高崎市元島名将軍塚古墳（前方後方墳・96ｍ）・玉村町下郷天神塚古墳（前方後円墳・約80ｍ)、広瀬川流域には前橋市八幡山古墳（前方後方墳・130ｍ）・前橋市天神山古墳（前方後円墳・126ｍ）・前橋市朝倉Ⅱ号墳（円墳・23ｍ)、粕川流域には前方後円墳と推定されている伊勢崎市華蔵寺裏山古墳（40ｍ）が築造されている。

上毛野南東部地域では蛇川流域に太田市頼母子古墳（円墳？）・太田市朝子塚古墳（前方後円墳・123ｍ）・太田市寺山古墳（前方後方墳・60ｍ）・太田市八幡山古墳（前方後円墳・84ｍ)、矢場川流域には足利市藤本観音山古墳（前方後方墳・126ｍ）・太田市本矢場薬師古墳（前方後円墳・80ｍ)・足利市県天王山塚古墳（前方後円墳とされているが前方後方墳の可能性もある）・足利市小曽根浅間山古墳（前方後円墳・58ｍ）が造営されている。

上毛野南西部地域の、特に西部山間地域には小規模な円墳が偏在し、前方後方墳・前方後円墳は築造されていない。同笵鏡の三角縁神獣鏡を所有する古墳が存在し、北山茶臼山古墳（１面)・三本木古墳（３面)・柴崎蟹沢古墳（２面）が著名である。この地域の弥生時代後期には樽式土器が分布しており、梅沢重昭は「弥生時代からの“伝統的地域”」として捉えている（梅沢1985)。また久保哲三は鏑川・烏川・井野川などの流域で谷水田を主とする小規模な稲作を経営していた地域とし、小規模古墳の被葬者が「毛野全域を支配するほどの権力をもっていたとは考えられず、畿内政

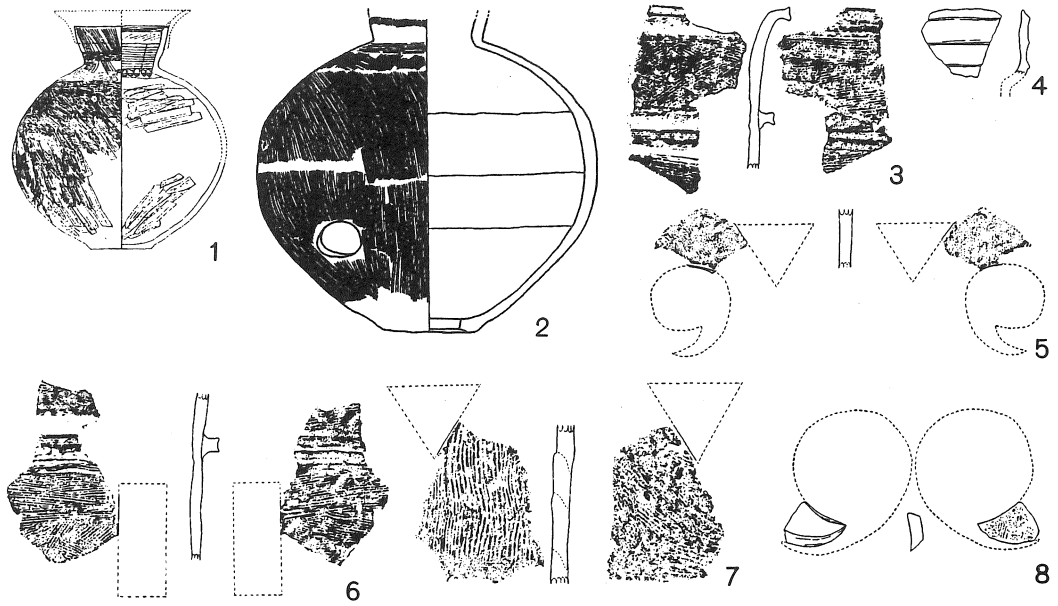



第４図　下郷天神塚古墳（1/10）

権と間接的に結びついた小地域の族長」と想定している（久保1986）。

山間地域の小円墳に併行して、井野川以東の広大な沖積地に前方後方墳・前方後円墳が築造されている。この地域は弥生時代にはほとんど集落が形成されていないものの、石田川式土器出現以降に集落が急激に広がっている。石田川式土器は東海西部地域に源流が求められ、久保哲三は東海西部「地域の人々の大規模な移動、毛野への入植によって石田川式土器が成立し、新しい農業技術と政治的・経済的にまとまった集団の力によってそれまで不毛であった利根川本・支流の広大な沖積地が開拓され、その基盤の上に大形古墳が成立した」とする。そして「畿内政権による東国への浸透活動が行われたこの時期の毛野の古墳は畿内政権の外縁にあって浸透活動の尖兵的役割をになった豪族の墳墓と考えられ、出土土器はその役割を東海地方の人々が果たしたことを示唆」するとしている（久保1986）。

この新開発地域である上毛野南西部・南東部地域それぞれに、傑出した大型前方後方墳が認められる。南西部地域では前橋八幡山古墳が築造され、同水系に続いて前方後円墳の前橋天神山古墳が造営されている。前橋天神山古墳の埋葬施設は粘土槨で、舶載三角縁神獣鏡をはじめ鏡５面・素環頭大刀・刀剣・銅鏃・鉄鏃・碧玉製紡錘車・赤色顔料の入った壺形土器等が副葬されている。後円部墳頂には埋葬施設を囲むように底部穿孔壺形土器（石田川式）が配列され、４世紀後半の年代が与えられている。ほぼ同時期と考えられている元島名将軍塚古墳と墳丘の規模に差があり、その勢力の違いを窺うことができる。南東部地域には藤本観音山古墳が築造され、同時期の前方後方墳の寺山古墳の２倍以上の墳丘規模を有している。古墳出現期の上毛野地域において、南西部地域は前橋八幡山古墳・前橋天神山古墳、南東部地域は藤本観音山古墳の絶対的優位性・卓越性が看取される。梅沢重昭は南西部地域を「割拠する形で小地域圏が成立」し、「これらに君臨する形で、利根川本流に面した地に盟主首長としての勢力をもったのが前橋天神山や同八幡山古墳の首長といえ、その主導性は毛野西部各地に拠っていた首長たちに及んでいたと思われる。前橋台地を中心に特出




第５図　朝子塚古墳（1･2＝1/10、3～8＝1/5）

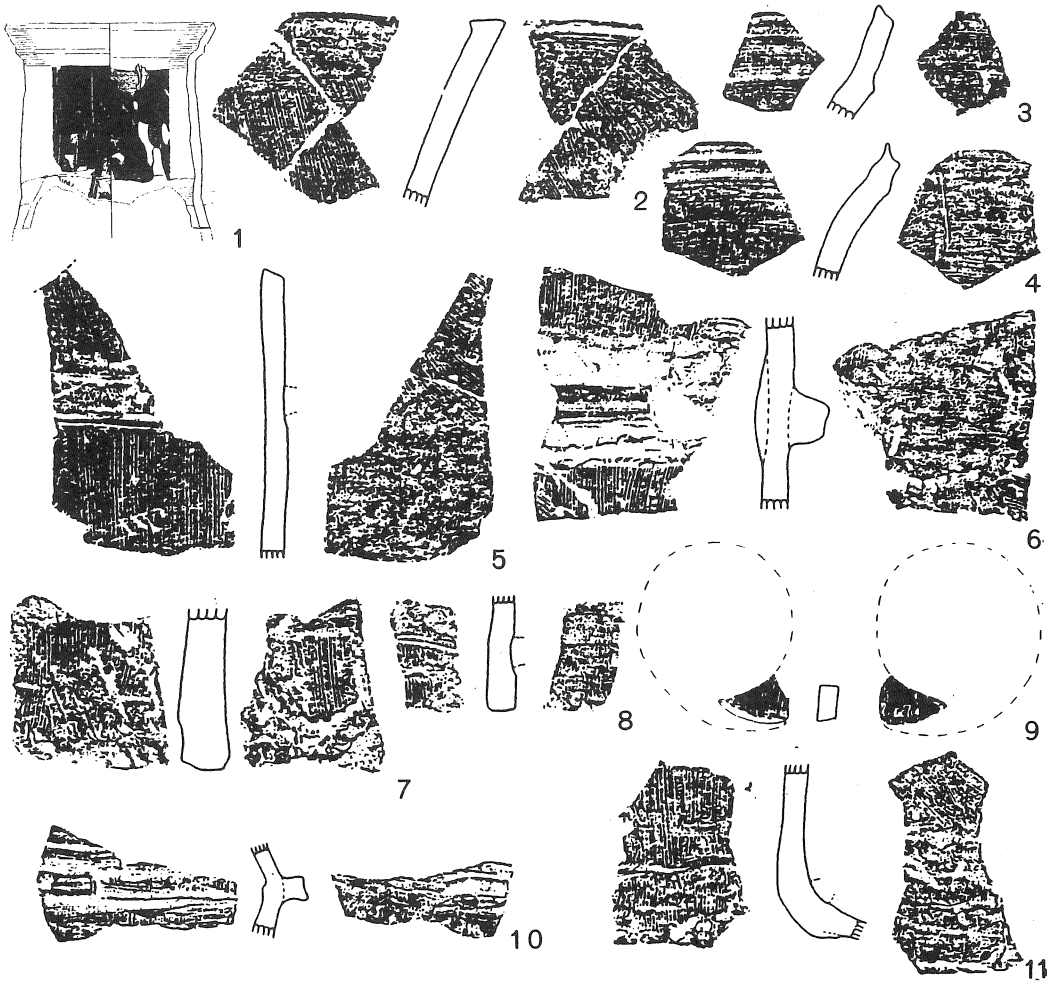
した規模の前方後方墳・前方後円墳の出現と、各地に輩出した円墳は、毛野地域政権がその成立の当初からきわめて強固なヒエラルキーを確立していたことをうかがわせる」とし、また藤本観音山古墳にも同様な傾向があるとしている（梅沢1985）。久保哲三も「利根川の支流域を単位とする勢力が分立・連合する中でまず前橋天神山古墳を擁する地域が優位を保ち」、前橋天神山古墳の被葬者が畿内政権と直接交渉をもち、同時期の西部山間地域に所在する三角縁神獣鏡をもつ円墳の被葬者はこの大首長から鏡を分与された小首長とする可能性を示唆している（久保1986）。飯塚卓二も前橋八幡山古墳と藤本観音山古墳の被葬者を頂点とするヒエラルキーが形成されていた可能性を示唆している。また「前橋八幡山古墳に続く次代の首長は、前橋天神山古墳というほぼ同規模の前方後円墳を築造したのに対し、藤本観音山古墳に続く矢場薬師塚古墳は、全長約80ｍと規模を縮小して」いる点について、「ヒエラルキーの頂点に立つ首長権が他の系列の首長に移った」ものと捉えている（飯塚1986）。前橋天神山古墳も後続する首長墓は円墳の前橋市文殊山古墳（60ｍ）で、前方後円墳の築造が認められないことから、卓越した大首長権が他の系列の移動しているものといえよう（註12）。

上毛野地域における埴輪祭式の受容は、古墳出現期の卓越した大首長権の移動と期を一にして行われている。そして埴輪祭式を受容した首長は古墳出現期の大首長権の系列ではなく、セカンダリクラスもしくはそれ以下の地位にあった首長の系列にあたる。南西部地域において受容期の埴輪祭式が認められる古墳は、高崎市倉賀野浅間山古墳（前方後円墳・171.5ｍ）、庚申塚古墳（円墳・45ｍ）、大鶴巻古墳（前方後円墳123ｍ）、下佐野大山古墳（円墳・約60ｍ）、下郷天神塚古墳、芝根７号墳、箱石浅間山古墳があげられる。一方、南東部地域では太田八幡山古墳、朝子塚古墳、小曽根浅間山古墳に認められる。

上毛野南西部地域の芝根７号墳の埴輪は橋本博文によって詳細に説明されている。「西日本・畿内の影響を受けて成立した関東で最古の特殊器台形土製品を含む。基部がハの字状に開いて下に平坦面を広くもって終わる特殊器台の名残りを有するもの（Ａタイプ）と、円筒状にほぼ直立するもの（Ｂタイプ）との２種類」あり、「宮山型と都月型の両タイプの流れをくむもの（Ａ・Ｂタイプ）が共存する」として、都出編年Ａ１様式に比定している（橋本1987）。倉賀野浅間山古墳・大鶴巻古墳では普通円筒埴輪と鰭付円筒埴輪が検出されている。外面調整は倉賀野浅間山古墳にＡ種ヨコハケ、大鶴巻古墳に二次タテハケ・Ａ種ヨコハケが施されている。器面には黒斑がみられる。下郷天神塚古墳（下郷遺跡ＳＺ46）は裾広がりの器形を呈している器台形埴輪（註13）で、一部倒立成形技法が用いられている。外面調整には二次タテハケが施され、器形は山陰型特殊器台形土器に系譜が辿れるものである。また壺形埴輪とされる破片のなかで、突帯間に円形竹管文が施文されているものに山陰の影響が指摘されている（橋本1987）。検出されている個々の埴輪はバラエティに富んでいる。芝根７号墳のものが最も古く、倉賀野浅間山古墳・大鶴巻古墳・下郷天神塚古墳は埴輪の特徴からいずれも川西編年Ⅱ期に比定できよう。

芝根７号墳は三角縁神獣鏡を副葬しているものの小規模な前方後円墳であることから、上毛野南西部の大首長権を継承するに至らなかった首長の墳墓といえる。前方後円墳の築造に伴って埴輪祭式を受け入れたものと思われるが、定型化した埴輪祭式ではなかった。続いて埴輪祭式を受容したのは、倉賀野浅間山古墳と、下郷天神塚古墳である。下郷天神塚古墳は元島名将軍塚古墳の系列にあり、前代とほぼ同規模の前方後円墳を形成し、依然としてセカンダリークラスの首長として位置付けられる。これにたいして、倉賀野浅間山古墳には定型化した円筒埴輪・器財埴輪が配列されている。倉賀野浅間山古墳は墳丘の規模から、前橋天神山古墳の大首長権を継承した大首長と推定される。倉賀野浅間山古墳の大首長は畿内政権との直接的な交渉において、畿内政権の古墳祭祀の重要な構成要素である埴輪祭式を受容したものと考えられる。また倉賀野浅間山古墳と同様に鰭付円筒埴輪が検出されている大鶴巻古墳が近接して築造されている。倉賀野浅間山古墳が大鶴巻古墳に先行するとされているが、飯塚卓二は大鶴巻古墳の規模が前橋天神山古墳に近いことから、倉賀野浅間山古墳に先行するものと捉えている（飯塚1984）。大鶴巻古墳の円筒埴輪には外面調整二次タテハケが施されていることから、先行する可能性もある。両者とも正式な調査が行われていないことから前後関係は明確ではないが、いずれにしても、大首長の系列が２代続いたことは確実であろう。

上毛野南東部地域の太田八幡山古墳には外面調整二次タテハケが施される川西編年Ⅰ期の埴輪が認められている。前代にセカンダリークラスの首長であった寺山古墳の系列にあたる。墳丘の規模は併行する前代の大首長系列の本矢場薬師塚古墳とほぼ同等であるが、本矢場薬師塚古墳には埴輪祭式が受容されていない。このことは上毛野南東部地域の東西の首長間で、大首長権の継承を争った可能性を秘めている。畿内政権とより親密な関係をもったのが西部の太田八幡山古墳の首長で、その交渉から埴輪祭式がもたらされたのではないだろうか。さらに畿内政権との交渉の拡大を背景として大首長権を掌握したのが朝子塚古墳である。朝子塚古墳は円筒埴輪（普通円筒埴輪・器台形埴輪・朝顔形埴輪）、家形埴輪、形象埴輪（楯）、壺形埴輪が検出され、後円部墳頂の方形埴輪列も




第６図　小曽根浅間山古墳（1＝1/10、2～11は縮尺不同）

確認されている。埴輪の特徴は川西編年Ⅱ期のものである。円筒埴輪には外面調整二次タテハケ・Ａ種ヨコハケが施されている。壺形埴輪は焼成前に底部・胴部に３孔の円孔が穿たれている。橋本博文は朝子塚古墳の前方部前端が撥形に開く墳形、墳丘と相似形の周溝形態、円筒埴輪の類似性から大和南東部の古墳群（柳本古墳群）との関連を想定している。また朝子塚古墳の円筒埴輪が山梨県中道銚子塚古墳・八代銚子塚古墳と類似することから大和柳本古墳群―遠江松林山古墳―中道銚子塚古墳・八代銚子塚古墳―上野朝子塚古墳というラインが系譜的に結ばれるものとしている。このラインがＳ字状口縁台付甕形土器の緊密な分布域と重なり、また漢中・後期の伝世鏡の存在ともあわせて、「各地域が畿内ヤマト政権の東国経営の上で有機的なつながりをもっていた」ものと捉えている（橋本1979）。さらに朝子塚古墳、中道銚子塚古墳に胴部などにも穿孔された壺形埴輪が存在することから、より緊密な関連性を指摘している（橋本1987）。朝子塚古墳は畿内政権の東国浸透政策による強い結び付きによって勢力が飛躍的に増強され、上毛野南東部地域の大首長として君臨することができたのであろう。

一方、セカンダリークラスに陥落した東部地域は古墳の規模を縮小させながらも、小曽根浅間山古墳に埴輪祭式が受容されている。外面調整二次タテハケが施されている器台形埴輪が検出され、山陰型特殊器台形土器に系譜を辿ることができる裾広がりの器形を呈している。上毛野南西部地域においても、下郷天神塚古墳に山陰型特殊器台系譜の埴輪が認められている。山陰型特殊器台形土器は奈良県纒向遺跡でも検出されていることから、セカンダリークラスの首長が山陰地方の首長と直接関係をもっていたことを示すものではない。橋本博文は纒向遺跡から吉備型特殊器台形土器も出土していることから、畿内で山陰型・吉備型の融合現象が生じている可能性を指摘している（橋本1987）。また京都府谷垣遺跡では吉備型特殊器台形土器の器形に山陰系統の文様が施されているものが検出されている。森将軍塚古墳においても山陰型特殊器台系譜に繋る可能性がある円筒埴輪が認められるものの、その器形は非常にバラエティに富むもので、山陰型特殊器台形土器との関連が明らかではない。そこで下郷天神塚古墳・小曽根浅間山古墳の首長と山陰地方の首長との直接的な関係を求めるよりも、畿内で変容したものが二次的に波及したものと捉えるほうが妥当といえよう。畿内での出土例が未だ少ないために明確にはできないが、その出自や関連した畿内の首長が明らかにできる可能性をもつものであろう。またこれらのなかに倒立成形技法が認められ、橋本博文によって倒立成形と山陰型特殊器台形土器との関係が示唆されていると同時に、吉備型特殊器台形土器の基部も倒立して製作されていることを指摘されている（橋本1987）。

上毛野地域における埴輪祭式の受容は、古墳出現期に君臨した大首長の勢力の衰退と、前代には大首長を支えていた首長系列の台頭によって行われている。梅沢重昭は「古墳の出現を大和政権が東国地域に大きくかかわった第１段階の現象」として捉えている。この段階には古墳と同時期の周溝墓にも底部穿孔壺形土器を主体とする「階層的な身分の枠を超越して普及していた祭祀」が行われている。そして大和政権と東国地域の大きな関わりを示す第２段階の現象が埴輪祭式の受容と把握している（梅沢1985）。この第２の現象は、埴輪祭式が重要な構成要素となった古墳祭祀が畿内政権において確立したことが背景にあるものと思われる。埴輪祭式が確立された古墳祭祀（前方後円墳祭祀）の全国的な波及に伴って、「各地の首長の身分を墳形の違いによって首長の系譜や格式を示し、墳丘の規模によって実力を表現する」前方後円墳体制が強化された。「日本列島主要部の首長が畿内地方の有力首長を核とする政治秩序のなかに組み入れられた」（都出1991）のと同様に、上毛野の首長も組み入れられていったのであろう。いち早く埴輪祭式を受容した首長は畿内勢力を後盾として勢力を伸長し、上毛野南西部・南東部地域の大首長へと成長したのではないだろうか。

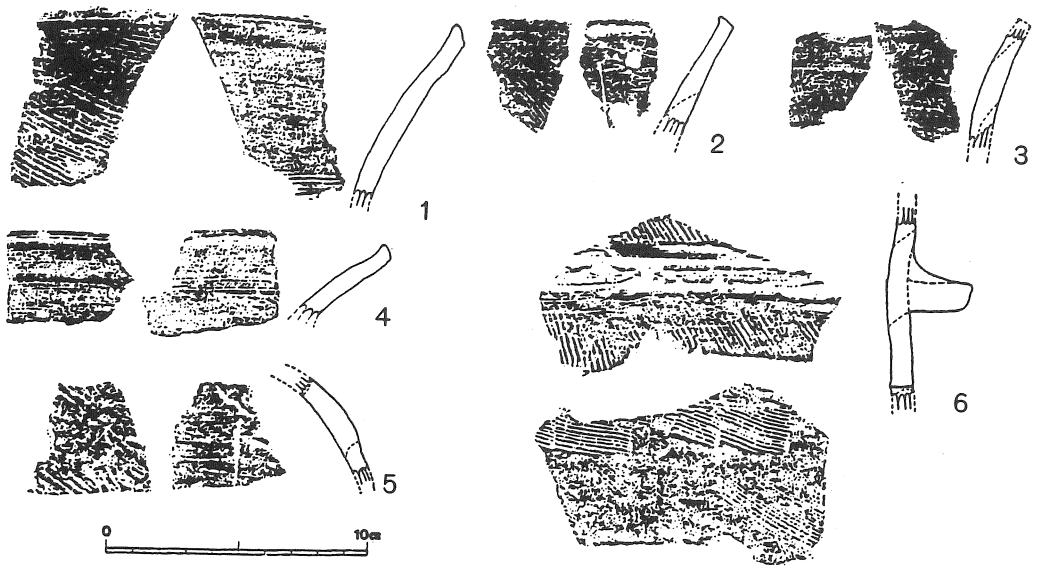
下毛野地域の出現期の古墳は小貝川・五行川流域と田川・姿川流域、巴波川流域の３地域に分布している。小貝川・五行川流域には前方後方墳の芳賀町八ツ木浅間山古墳（57ｍ）、亀の子塚古墳（56.3ｍ）、市貝町上根二子塚１号墳（29ｍ）、上根二子塚３号墳（42.7ｍ）、益子町星の宮浅間塚古墳（52ｍ）、真岡市山崎１号墳（33.4ｍ）と方墳の上根二子塚２号墳、山崎３号墳が所在している。田川・姿川流域には前方後方墳の宇都宮市茂原古墳群の権現山古墳（63ｍ）・大日塚古墳（35.8ｍ）・愛宕塚古墳（50ｍ）と石橋町文殊山古墳（前方後方墳の可能性）、南河内町三王山南塚１号墳（46.5ｍ）・２号墳（50ｍ）と方墳の南河内町朝日観音遺跡１号墳（15ｍ）がある。巴波川流域には前方後方墳の藤岡町山王寺大桝塚古墳（96ｍ）と方墳の大桝塚北東古墳・北古墳が存在している。

那須地域の出現期の古墳は那珂川流域に分布し、前方後方墳の湯津上村下侍塚古墳（84m）、上侍塚古墳（114m）、上侍塚北古墳（48.5m）、小川町駒形大塚古墳（64m）、温泉神社古墳（50m）、那須八幡塚古墳（68m）、矢板市木幡神社古墳（52.6m）と方墳の下侍塚8号墳、小川町観音古墳、富士山古墳が認められる。

下毛野・那須地域においては方形を基本とした前方後方墳・方墳が築造され、さらに数世代にわたって造営されていたものとされる。特に那須地域においては駒形大塚古墳→那須八幡塚古墳→温泉神社古墳→上侍塚古墳→下侍塚古墳→上侍塚北古墳→という6代にわたる首長墓が、4世紀中頃から5世紀前半にかけて築き続けられたとされ（大金1987）、古墳時代前期の関東地方においては特異な地域である。また巴波川流域では山王寺大桝塚古墳のみで、継続する前方後方墳・前方後円墳は構築されていない。

弥生時代後期後半の小貝川・五行川流域と田川・姿川流域には在地の二軒屋式土器を出土する遺跡が多く、また小貝川・五行川流域では常陸地域の十王台式土器も共伴している。古墳出現期になると、在地の系統をひく土器は姿を消し、南関東の五領式土器や東海系の土器が多くの集落遺跡にみられる。集落の立地に変化はないものの、遺跡数が著しく増加していることから、開発が急激に進んだことが想定されている。そして茂原大日塚古墳・茂原愛宕塚古墳などの祭祀にも在地の影響を残す土器は認められず、南関東系・東海系土器群が使用されている。久保哲三は遺跡数の著しい増加は急速に開拓の進んだことを示すとして、その「開拓の推進力をになったのは、新たに加わった外来系土器に象徴される入植者たち」と想定している。さらに、この地域の土器の断続的変化と出現期古墳が東海系土器を供出するのと対応することから、「かなり多くの人間の移動によるものと考えられ、それは畿内政権による東国への浸透活動に東海地方の人々がかなり重要な役割をになっていたことを示唆」するとしている（久保1990）。小森紀男は「墳墓祭祀は、本来最も保守的・伝統的な儀礼であり、それに使用されている土器は、被葬者及び祭祀を執り行う集団に強く根付いたものであろう。とすれば、この土器が被葬者の出自系譜に深く関わっているという考え方が、説得力をもってくる。茂原大日塚古墳・茂原愛宕塚古墳など、東海系土器を出土する初期の関係者が東海地方との何らかのつながりをもっていたことは十分考えられ、東国古墳の発生が、畿内王権の東国浸透の開始とする政治的図式の中で、東海地方の人々が重要な役割を担っていたことが窺われ」るとしている（小森1990）。

下毛野地域も上毛野地域と同様に、古墳の出現に東海地方の影響が認められる。しかし出現期の古墳は下毛野・那須地域の前方後方墳と方墳にたいして、上毛野地域では前方後方墳と円墳が築造されている。また上毛野地域では後続する首長墓として前方後円墳を採用しているのにたいして、下毛野地域では依然として前方後方墳が造営され続けている。さらに上毛野地域の前方後円墳には埴輪祭式が受容されているのにたいして、下毛野地域の前方後方墳には埴輪祭式が認められていない。下毛野地域の埴輪祭式の採用は5世紀中葉の宇都宮市笹塚古墳を初現とし、同時に前方後円墳が築造される。上毛野地域と下毛野地域の違いは出現期古墳の墳形のみではなく、埴輪祭式の受容や前方後円墳の築造においても大きな相違が認められる。久保哲三は関東以西の初期古墳と違い、畿内前II期古墳の構成要素をすべて具備している古墳が認められないことを、毛野地域の初期古墳

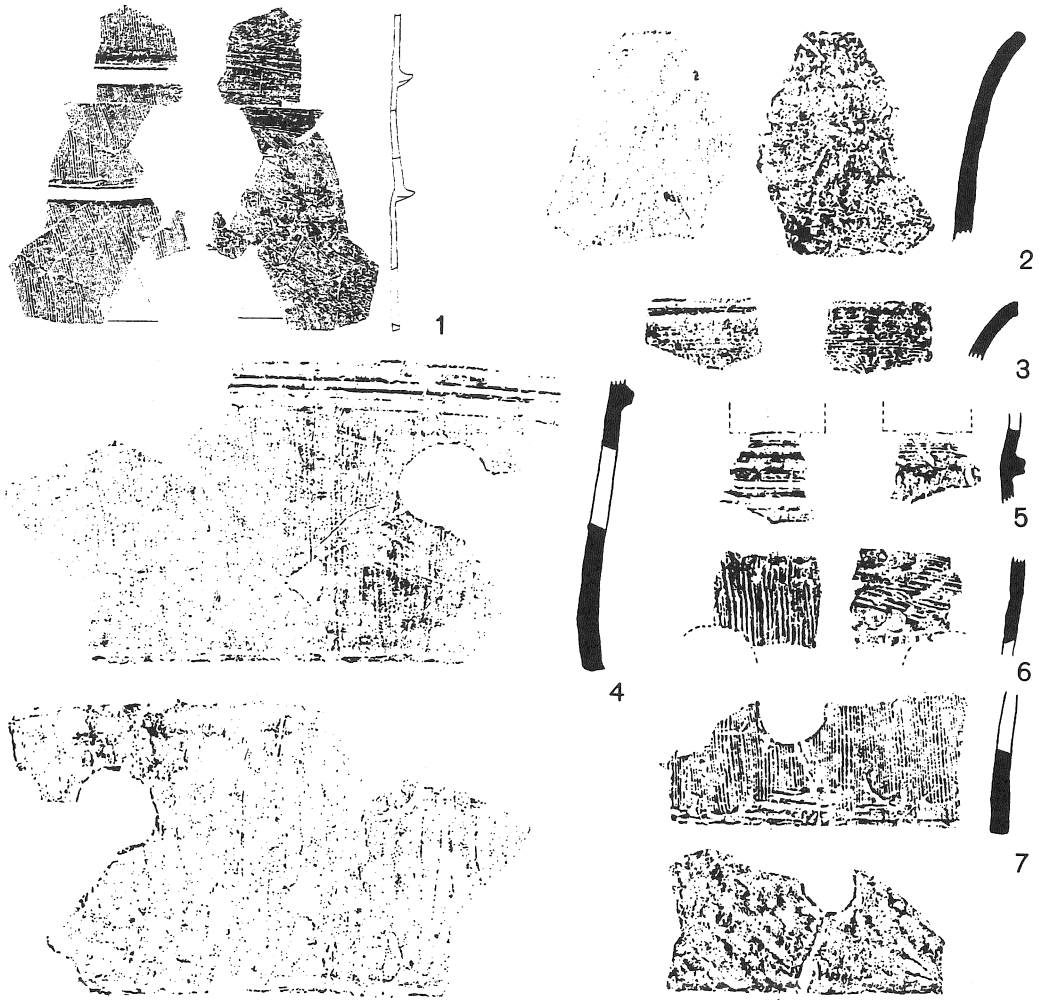



第7図　鏡塚古墳

の地域的特色としている。「しかし畿内的要素をすべて具備していないとはいえ、前II期の段階ですでに円筒埴輪をもち或は三角縁神獣鏡をもつ古墳は圧倒的に上毛野に多く、その多くは前方後円墳である。下毛野の前II期における上毛野と下毛野の畿内政権との関わり方が大きく異なることは明らかである。近藤義郎は前方後円墳を大和政権の古墳祭祀と考え、前方後円墳を地域政権が首長墓として採用するのは、大和政権と祖霊を共有し、擬制的な同祖同族関係を結んだことを示すと考えたが（近藤1983）、このように考えれば上毛野…では前II期の段階でいち早く畿内中枢と連合関係を結んだとみられ、下毛野はやや傍流的な小勢力が分立していた地域とみることができよう。このような上毛野…の優位は、…東山道の前II期における要地に位置するという地理的条件にもよると思われる」としている（久保1986）。毛野地域における畿内政権の浸透に東山道ルートが利用されていたとするならば、埴輪祭式の波及は上毛野地域において途絶えたことになる。毛野地域においては、埴輪祭式の受容と前方後円墳の築造とは期を一にして行われている。下毛野地域と上毛野地域の首長墓の絶対的な違いは、下毛野地域において前方後方墳が継続して造営されていることにある。埴輪祭式＝完成された前方後円墳祭祀の伝播が上毛野地域で留まっていたがために、下毛野地域では依然として前方後方墳の首長墓が継続して造営されていたものと理解したい。

**(2)　常陸地域における埴輪祭式の受容**

常陸地域において、弥生時代後期後半には十王台式土器を代表とする在地色の強い文化が排他的に存在し、東北地方南部の影響も窺われる。また弥生時代の方形周溝墓は認められず、古墳の出現直前の外来系土器の流入に伴って出現すると考えられている（塩谷1985）。出現期古墳は毛野地域と同様に水系単位に築造され、多くの地域で前方後方墳と前方後円墳が継続して築かれている。久慈川中流域には大宮町富士山４号墳（前方後方墳・48ｍ）と常陸太田市梵天山古墳（前方後円墳・151ｍ）が所在している。那珂川には中流域の水戸市安戸星１号墳（前方後方墳・29ｍ）と河口の




第８図　長辺寺山古墳（1＝1/10）、舟塚山古墳（2～7＝1/5）

鏡塚古墳（前方後円墳・105.5ｍ）が認められる。涸沼川流域には前方後方墳の茨城町宝塚古墳（39ｍ）のみであるが、茨城県最古とされる埴輪を出土している諏訪神社古墳群が形成されている。恋瀬川には上流の八郷町丸山１号墳（前方後方墳・55ｍ）と佐自塚古墳（前方後円墳・58ｍ）、霞ヶ浦への河口付近には玉造町勅使塚古墳（前方後方墳・64ｍ）と茨城県内最大の前方後円墳の石岡市舟塚山古墳（182ｍ）が築造されている。桜川には上流の岩瀬町狐塚古墳（前方後方墳・36ｍ）と長辺寺山古墳（前方後円墳・120ｍ）、中流のつくば市桜塚古墳（前方後方墳・30ｍ）と山木古墳（前方後円墳・48ｍ）、霞ヶ浦への河口付近には土浦市宕塚古墳（前方後方墳・54ｍ）と王塚古墳（前方後円墳・84ｍ）がある。霞ヶ浦南岸には桜川村原１号墳（前方後方墳・29ｍ）と牛堀町浅間塚古墳（前方後円墳・85ｍ）、北浦東岸には大洋村大峰山１号墳（前方後方墳・31ｍ）と鹿島町伊勢山古墳（前方後円墳・95ｍ）をあげることができる。また小貝川中流には前方後方墳が築かれずに、前方後円墳の下館市芦間山古墳（120ｍ）が構築されている。他の地域との関連から、前方後方墳

が前方後円墳に先行するものと想定される。

前方後方墳のなかで副葬品等の内容が判明しているものは、丸山1号墳・狐塚古墳・桜塚古墳・勅使塚古墳・原1号墳などである。これらの前方後方墳の特徴として、墳丘長が30～60mの規模で木棺直葬・粘土床といった簡略な埋葬施設を主体としていることがあげられる。検出されている土器は五領期後半の新段階に比定され、副葬品としては狐塚古墳の方形板革綴式短甲、桜塚古墳の輝緑凝灰岩製石釧、丸山1号墳の勾玉石材の多様化と滑石製品を含まない傾向から4世紀第Ⅳ四半期の年代が与えられている。他の前方後方墳もほぼ同様の年代が想定されている。これらの前方後方墳には埴輪祭式が認められていないが、土器を用いた古墳祭祀が展開されている。

塩谷修は前方後方墳の土器祭祀のあり方に2つのタイプがあるとしている。まず勅使塚古墳で認められている埋葬施設上における土器祭祀で、壺・器台・高坏形土器を使用する。もう一つは、安戸星1号墳にみられる墳丘くびれ部における土器祭祀で、壺形土器を中心に甕・鉢形土器等を用いる。狐塚古墳には両者が併存している。年代的には前者を古相なものとして捉えている。また壺・器台・高坏形土器をセットとする埋葬施設上の土器祭祀の源流を弥生時代後期の吉備を中心とした地域に求めている。またこの土器祭祀が三重県津市高松C墳墓遺跡・愛知県豊橋市浪の上1号墓などで認められていることから、その波及には東海地方が大きな役割を担っていたことを想定している（塩谷1990）。これは関東地方において出現期の前方後方墳から東海系土器が多数出土していることと合致しているが、茨城県の前方後方墳から東海系土器を出土した例は確認されていない。また岩崎卓也が簡略化された埋葬施設の構造に東海地方の政治的影響の存在を指摘していることから（岩崎1988）、「土器祭祀の形態や埋葬施設の構造を見るかぎりにおいて、茨城県における古墳出現の背景にも東海地方の政治的影響力の存在が重視されることになる。しかし、周辺の栃木や、千葉などのように土器群の中に東海地方系の土器を含むものは認められず、年代的に一段階その出現が遅れた状況が窺われる」としている（塩谷1990）。また前方後方墳の伝播経路については、下毛野方面から河川交通を利用したコースと、南東部の下総方面から霞ヶ浦・北浦の水上交通を利用したコースを想定している（塩谷1984）。

前方後方墳の築造後、継続する首長墓は前方後円墳であり、埋葬施設は粘土槨・割竹形木棺に統一される傾向にある。この段階に埴輪祭式が受容されている。副葬品などの内容が明らかな古墳は少なく、年代の特定が困難であるが、滑石製の玉類が含まれていることから5世紀第Ⅰ四半期を前後する年代が想定されている。なかでも精巧で多種多様な滑石製模造品を副葬する鏡塚古墳が、4世紀第Ⅳ四半期に遡る可能性を指摘されている。

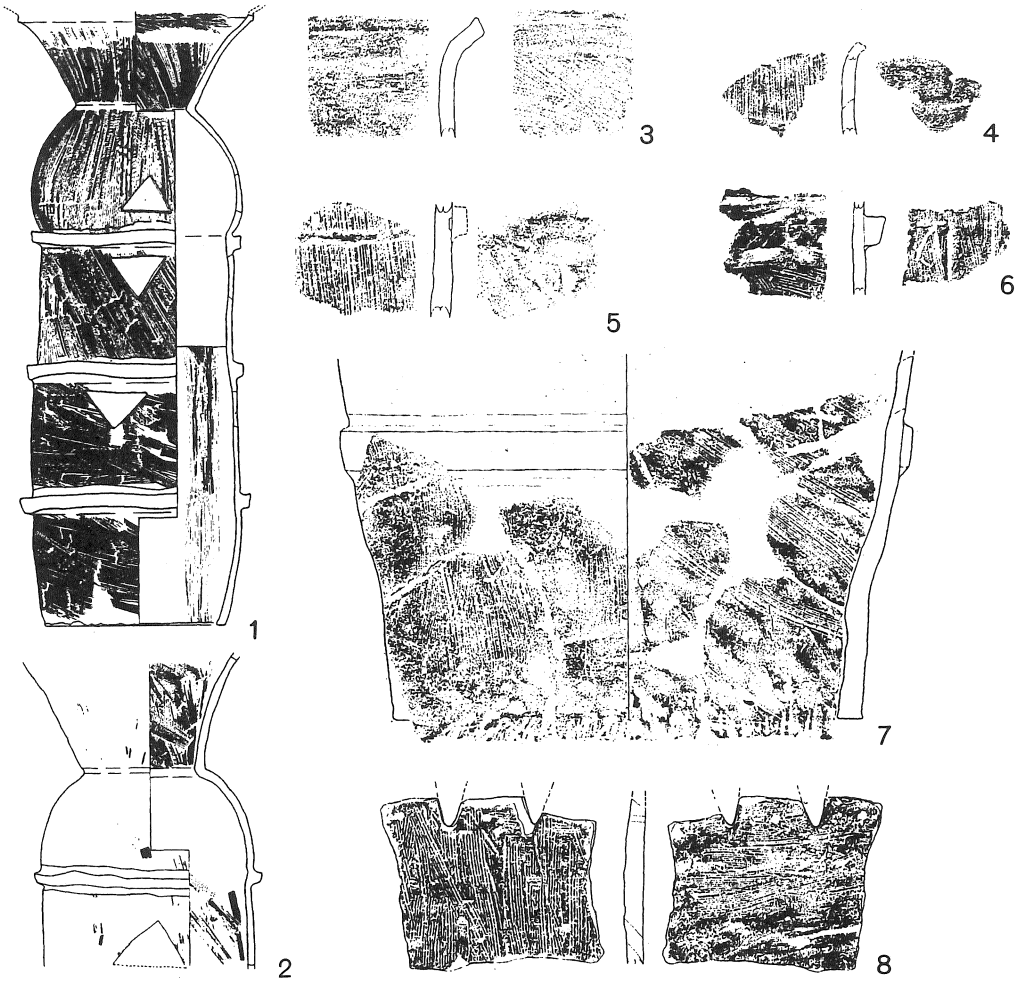
埴輪祭式が受容されているのは梵天山古墳・鏡塚古墳・長辺寺山古墳・芦間山古墳・上出島2号墳などの大型の前方後円墳で、山木古墳などの中型墳には認められていない。梵天山古墳・芦間山古墳・上出島2号墳では壺形埴輪のみが検出されている。上出島2号墳の壺形埴輪はほぼ同一規格のものが、部分的に配列されたような状況で確認されている（大森他1975）。梵天山古墳のものは川西宏幸が壺形土器として捉えている。鏡塚古墳の円筒埴輪は突出度の非常に強い鍔状を成す突帯が貼付されている。外面調整に二次タテハケが施され、ヨコハケは認められない。また形象埴輪が確認されている。長辺寺山古墳では普通円筒埴輪のみで、壺形埴輪・形象埴輪はみられない。外面

調整に二次タテハケ（ナナメハケ）が施されている。器形は胴部中央がくびれる可能性を指摘されている。突帯は長野県森将軍塚古墳などで認められている擬口縁技法のものと、貼付突帯のものがある。また稲村繁によって、茨城県内最古のものとされる朝顔形埴輪が、諏訪神社古墳群中から検出されている。4世紀代の年代が与えられているが、出土状況から埴輪棺の可能性が高い。さらに佐自塚古墳からは、橋本博文が「在地の弥生式土器や古式土師器などからの伝統から出現したとは考えにくく、西日本・畿内などで変容されたものが2次的に波及されたもの」とする（橋本1987）器台形土製品が検出されている。

長辺寺山古墳・鏡塚古墳などで検出されている円筒埴輪は畿内の直接的な系譜にあるものとは捉えられない。特に長辺寺山古墳では擬口縁技法による突帯が存在している。また諏訪神社古墳群中出土の朝顔形埴輪も森将軍塚古墳との共通した要素が指摘されている（稲村1983）。大橋泰夫らは森将軍塚古墳・川柳将軍塚古墳例と長辺寺山古墳例において内面調整やスカシ孔の形態などに相違がみられるものの、擬口縁技法が遠隔の地で独自に生み出されたとは考え難いことから、長辺寺山古墳の埴輪の系譜と被葬者の性格に注目している（大橋他1984）。

埴輪祭式が認められている前方後円墳の築造年代を5世紀第Ⅰ四半期とすると、検出される円筒埴輪は川西編年のⅢ期もしくはⅡ期に比定されよう。川西編年において、この段階には外面二次調整にB種もしくはA種ヨコハケが施され、器面には黒斑が認められる。しかし常陸地域のこの時期の円筒埴輪にはヨコハケが施されているものはなく、5世紀中葉に編年されている舟塚山古墳にも二次調整のタテハケが施されている。川西宏幸は舟塚山古墳の円筒埴輪を突帯やスカシ孔も特徴からⅡ期に設定し、常陸地域ではⅡ期の年代が畿内Ⅳ期に併行する頃まで下がると指摘している（川西1988）。窖窯焼成導入以前においては、むしろタテハケによる二次調整が常陸地域の円筒埴輪の特徴といえよう。稲村繁も外面二次調整にタテハケという古式の様相が、茨城県における特徴的な現象として捉えている。また埴輪祭式を有する大型前方後円墳が主要河川の河口付近に立地しているとして、5世紀代になってはじめて高い生産性と主要交通路としての河川を掌握する有力首長が出現したことを示すとする。そして有力首長が出現し、大型前方後円墳が築造される段階になって埴輪祭祀（埴輪祭式）が伝播されると推定している。さらに埴輪の特徴からすべて同一系譜として扱えないことから、各主要河川（涸沼川・那珂川、恋瀬川、桜川）ごとに異なる伝播経路によって出現したものとしている。なかでも最も古い埴輪が検出されている諏訪神社古墳群・鏡塚古墳が所在する涸沼川・那珂川流域が、常陸地域における埴輪の出現地と位置付けている（稲村1983）。

塩谷修は山木古墳・佐自塚古墳などの中型の前方後円墳には土器祭祀が継続するのにたいして、大型の前方後円墳には埴輪祭式が認められることから、前方後円墳の出現に伴って、特に大型の前方後円墳に限って埴輪祭式が受容されたものと推定している。そして畿内的な埴輪の系列として捉えられない在地色の強い埴輪の様相を東日本周辺地域との密接な関連によるものとし、出現期前方後方墳に認められた畿内政権との間接的な関係が継承されていたものと想定している。また初期前方後円墳の墳丘規模の大小や埴輪祭式の有無といった較差を、「いまだ大和政権との間接的関係にありながらも、出現期前方後方墳に比べ密接な、中にはより優位な政治的立場に立つ首長層の姿」として捉えている（塩谷1990）。




第９図　小金塚古墳（1･2＝1/10、3～8＝1/5）

常陸地域の受容期の埴輪祭式のなかで、壺形埴輪のみを配列する祭式（梵天山古墳･芦間山古墳･上出島２号墳）が認められている。これは継続されずに、５世紀第Ⅰ四半期のみの古式な特徴として捉えられている。塩谷修は埴輪受容期における円筒埴輪による埴輪祭式と壺形埴輪による埴輪祭式の相違が、「首長の系譜あるいは畿内中枢部との関係における較差（その際前者が優位と考えられる）」を反映しているものと想定している（塩谷1990）。

これらの前方後円墳に後続して築造されているのが舟塚山古墳で、墳丘規模が大幅に拡大されている。車崎正彦は墳丘形態、埴輪の検討から５世紀中葉の年代観を与えている（車崎1976）。この年代から上毛野地域の太田天神山古墳、下毛野の笹塚古墳という大首長墓が想起され、この時期に大型前方後円墳を形成できるほどの勢力を保持しえた大首長への成長が窺われる。川西宏幸は三角板鋲留短甲→横矧板鋲留短甲→挂甲の推移から５世紀中葉が畿内政権による軍事動員の広域化が実現されはじめる時期で、墳丘の大型化はこの圧力に抵抗するために勢力を結集した結果として捉え

ている（川西1990）。舟塚山古墳に併行して下総地域の利根川下流域には小見川町三之分目大塚山古墳（前方後円墳・120m）が築造されている。車崎正彦は三之公目大塚山古墳の円筒埴輪が舟塚山古墳の円筒埴輪と共通した特徴をもつことを指摘し、また埋葬施設の長持形石棺の石材を筑波山系に予想している。これらのことから、三之分目大塚山古墳を造営した勢力と舟塚山古墳を造営した勢力との従属的な連合を想定している（車崎1987）。

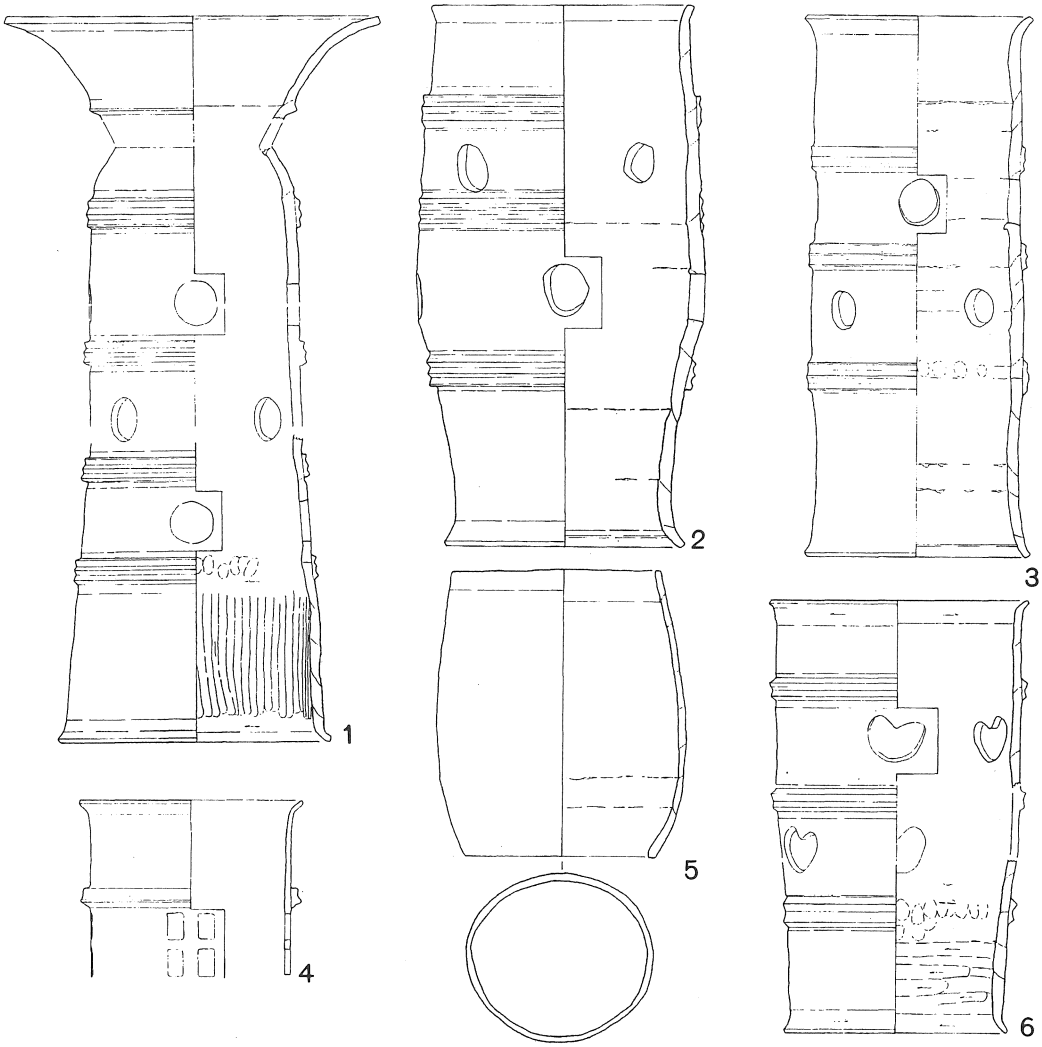
常陸地域において埴輪祭式は、各水系単位の首長によって受容されている。常陸地域は上毛野地域と同様に、前方後円墳の築造と埴輪祭式の受容が同時に行われている。しかしすべての前方後円墳に認められるわけではなく、特に大型前方後円墳の首長によって採用され、中型前方後円墳には導入されていない。また受容の時期は上毛野地域とくらべて後出している。常陸地域への埴輪祭式の伝播が遅れたことは、その波及が上毛野地域で留まり、下毛野地域に到達していないことが大いに関連しているものと思われる。

**(3) 南関東地域における埴輪祭式の受容**

南関東の東京都・神奈川県・埼玉県地域における出現期古墳の様相は、前方後方墳と前方後方形周溝墓に特徴が認められる。前方後方墳には近接して同時期の方墳が存在している例が多く、前方後方形周溝墓は方形周溝墓からなる墓域内に形成されている。両者には築造企画の共通性が認められるものもあり、また築造時期も併行している。坂本和俊は前方後方墳と前方後方形周溝墓の違いを、被葬者の階級差と所属する共同体の社会関係を反映したものと捉えている（坂本1990）。

前方後方墳・前方後方形周溝墓に続いて水系ごとに大型の前方後円墳が築造されている。この時期の前方後円墳として、多摩川流域の大田区蓬莱山古墳（推定115m）・亀甲山古墳（104m）、鶴見川流域の横浜市観音松古墳（72m）・川崎市加瀬白山古墳（87m）、相模川流域の厚木市地頭山古墳（72m）・海老名市瓢箪山古墳（推定72m）・秋葉山古墳群、荒川流域の川口市高稲荷古墳（75m）などが認められている。蓬莱山古墳の埋葬施設は粘土槨で、仿製四獣鏡・紡錘車形石製品・硬玉製勾玉が検出されている。観音松古墳は粘土槨に舶載内行花文鏡・銅鏃・硬玉製勾玉・算盤玉・紡錘車形石製品、加瀬白山古墳は木炭槨に三角縁四神四獣鏡（椿井大塚山古墳と同笵）と小型内行花文鏡などが出土している。遠藤秀樹は蓬莱山古墳・観音松古墳・加瀬白山古墳・世田谷区喜多見７号墳（前方後方墳・76m）の副葬品の検討から、多摩川・鶴見川流域では出現期古墳は大型前方後円墳で、関東地方の他地域と異なり前方後方墳から前方後円墳への交代型ではないとしている。「また関東地方の前方後方墳からは小型仿製鏡が多く出土することから蓬莱山古墳は墳形が前方後方墳の可能性」を示唆している（遠藤1989）。坂本和俊はこれらの前方後円墳の出現を玉生産と関連付けて把握し、原石を産出する地域の首長をその管理者として鏡の分有・前方後円墳の築造が認められたものと捉えている（坂本1990）。しかしこれらの前方後円墳には畿内の古墳祭祀の重要な構成要素である埴輪祭式は受容されていない。

南関東地域において受容期の埴輪祭式が認められているのは、相模川流域の伊勢原市小金塚古墳（円墳・48m）と多摩川流域の大田区西岡32号墳（円墳・30m）である。小金塚古墳では円筒埴輪（普通円筒埴輪・朝顔形埴輪）と形象埴輪が検出されている。外面調整は多岐にわたり、一次調整のみのタテハケ・Ａ種ヨコハケ（註14）、二次調整のタテハケ・Ａ種ヨコハケが存在し、同一個体




第10図　雷電山古墳（1/10）

内においても段によって使い分けられている。半円形・三角形などのスカシ孔を突帯間に2孔穿孔し、貼付突帯には投錨技法が認められる（望月・立木1983、遠藤1983、久保1985）。西岡32号墳は隣接する西岡31号墳と同一古墳となる前方後円墳の可能性が指摘されている（今井1984）。検出されている普通円筒埴輪はスカシ孔が円形で、突帯の突出度が強い。外面調整は二次調整を欠き、器面には黒斑が認められている（大田区立郷土博物館1988、清水1986）。埴輪の特徴から、小金塚古墳が川西編年Ⅱ期、西岡32号墳が川西編年Ⅱ～Ⅲ期に比定されるものであろう。

小金塚古墳の周辺には大型前方後円墳の地頭山古墳・瓢箪山古墳・秋葉山古墳群などの大首長墓が築造され、坂本和俊は小金塚古墳がこれらに後続する相模川流域全体に影響力をもった首長墓と考えている（坂本1990）。また小金塚古墳に後続する古墳にも埴輪祭式は認められていない。突如として、小金塚古墳のみに埴輪祭式が受容され、その祭式は継承されていない。西岡32号墳も周辺

には蓬莱山古墳・亀甲山古墳が築造されており、ほかに埴輪祭式を受容した古墳は確認されていない。遠江・甲府盆地・善光寺平・上毛野・常陸地域においては、いずれも大型前方後円墳＝有力者長によって導入されているのとくらべて、対象的である。南関東地域においては、円墳を造営した首長が畿内の古墳祭祀を忠実に、そして独自に受け入れている。西岡32号墳は前方後円墳の可能性があり、また古墳群中における位置付けも不明なために明確ではないが、少なくとも小金塚古墳は前方後円墳を築けるほどの勢力を保持していないものの、古墳祭祀の共通性から畿内政権との密接な関係が推定される。このことから古墳祭祀を異にしている周辺の前方後円墳の大首長を牽制する役目を担った首長とすることができるかもしれない。また突如として埴輪祭式をもつ古墳が出現していることから、畿内政権によって派遣された首長と考えることも不可能ではないであろう。さらに小金塚古墳の朝顔形埴輪と兵庫県神戸市白水薬師山古墳例との形態が近似していることから、畿内外縁部の首長と関連のあった首長の可能性もある。いずれにしても、前方後円墳の大首長とは系譜の異なる首長として捉えることができよう。

小金塚古墳の後、埴輪祭式が採用されているのは帆立貝形前方後円墳の世田谷区野毛大塚古墳と東松山市雷電山古墳である。両者とも川西編年Ⅲ期に比定されるものである。野毛大塚古墳は外面二次調整にＢ種ヨコハケが施され、畿内的な埴輪として捉えることができよう。一方、雷電山古墳は裾広がりの器形や倒立成形技法、外面調整にハケが認められないなど、畿内からの一連の系譜にある埴輪とはできない。佐藤好司は裾広がりの器形を山陰型特殊器台形土器の直接的な影響とせずに、下郷天神塚古墳例との関連で捉える必要性を示唆している。またハケが施されずに、ケズリの後ナデによって仕上げられている外面調整について、これを土師器に近い製作技法として捉えている。雷電山古墳の埴輪製作に土師器工人の関与を推定し、専業的な埴輪製作者集団が編成されていない単発的な製作を推定している（佐藤1986）。若松良一は北武蔵最古の埴輪を囲繞しながら帆立貝形前方後円墳という墳形を呈していることから、被葬者と畿内（河内）政権との強い結び付きを想定している（若松他1987）。雷電山古墳に直接繋る首長墓や埴輪の製作技法を継承している例が認められていないことから、その特殊性を窺うことができる。佐藤が指摘しているようにその器形を直接山陰型特殊器台形土器の系譜、また畿内からの系譜としても捉えることはできず、前代に関東地方で受容されたものが変容して、波及されたものといえよう。恐らくは、下郷天神塚古墳・小曽根浅間山古墳で山陰型特殊器台形土器の系譜にある円筒埴輪が確認されていることから、上毛野地域の影響を推定することができる。

## ５．関東地方における埴輪祭式の波及

関東地方およびその周辺地域における埴輪祭式の受容と古墳の出現には時間的に差異が存在している。この地域における出現期の古墳の多くは前方後方墳であり、前方後円墳の出現は一段階後出している。そして南関東地方を除いて、前方後円墳の築造に伴って、埴輪祭式が受容されている。埴輪祭式の受容は遠江・甲府盆地・善光寺平・上毛野・南関東地域とも川西編年のⅠ期・Ⅱ期の過渡期からⅡ期の４世紀後葉頃に期を一にして行われている。一方、常陸地域においてはこの時期に前方後方墳が出現し、５世紀初頭前後に埴輪祭式が受容されている。

関東地方およびその周辺地域における出現期古墳の分布から、古墳の伝播ルートを復元することができる。出現期古墳の多くは河川流域に立地し、その伝播には河川交通が大いに活用されたことが想定される。従来から関東地方への古墳の伝播経路として、尾張―駿遠―甲斐―相模・南武蔵―常総という東海道ルートと、美濃―信濃―毛野という東山道ルートが着目され、神奈川県・東京都・千葉県・茨城県・栃木県那須地域には東海道ルート、群馬県・栃木県・埼玉県には東山道ルートを経て伝播してきたことが想定されている（甘粕・久保1966）。しかし出現期古墳の分布状況は、その伝播経路が複雑であったことを窺わせる。大局的にみるならば、東海道ルート・東山道ルートは想定されるものの、それに加えて畿内―琵琶湖―日本海沿岸(北陸地方)―信濃―毛野という日本海ルートも考える必要がある。これは古墳出現の直前に関東地方に認められている非在地系土器のなかに北陸系の土器が含まれていることからも容認されるものである。従来の見解では、東海道ルート・東山道ルートともに畿内から東海地方西部に至り、ここから海伝いに進んでいくのが東海道ルート、美濃―信濃と山間部へ進むのが東山道ルートとして把握されている。しかし出現期古墳の分布状況からはこのように単純なルートとして捉えることができず、東海道ルート・東山道ルートともにいく筋にも樹枝状に拡散しながら東国へと進んでいったものといえよう。

まず東海道ルートは東海地方から海伝いに東進し、遠江地域に至る。この遠江地域では北岡大塚古墳や小銚子塚古墳が形成されている。この地域で２つに別れて、１つは海伝いにさらに東進し、もう一方は天竜川を遡上して信濃地域に向かうもので、東山道ルートに繋るバイパス的なコースといえよう。信濃地域では松本平に弘法山古墳が築かれている。東進したコースは富士川に至り、ここでも富士川を遡上するコースと東進するコースに別れる。富士川を遡上するコースは甲府盆地に到達する。甲府盆地に至るコースは３つのコースが想定されている。１つは富士川河口より富士山の西麓を直進し、本栖湖・精進湖を経て御坂山塊を越え右左口に出るコースで、中道銚子塚古墳が存在する東山古墳群を甲府盆地の入り口とする最短コースである。２つめは富士川を遡上するコースで、赤烏元年鏡を出土した三珠町鳥居原狐塚古墳（円墳・18m）の位置を重視した説で、河川交通の利用、笛吹川の上流域を経て関東へ至るルートの存在などから注目される。３つめは天竜川を遡上し伊那谷・諏訪湖から甲府盆地に至るコースも想定されている（小林1986）。河川交通の利用を考えるならば、富士川を遡上するコースが最も有効であるように思われる。富士川の河口には浅間神社古墳（前方後方墳・103m）が築造されている。東進するコースは南関東地域に至り、相模川下流域に平塚市真土大塚山古墳（前方後方墳？・43m）を形成し、相模川を遡上して流域に出現期古墳を造営させ、一方ではさらに東進して東京湾に至る。東京湾岸を北上し、多摩川・荒川を遡上して内陸部へと進み、また三浦半島から対岸の房総半島にわたり、東京湾岸を北上して常陸地域に到達する。このように東海道ルートは大河川の河口付近で枝別れしながら東進してきたものと想定される。またこれらの大河川の流域には出現期古墳が形成され、その首長によって河川交通が掌握されていたものと考えられる。さらに、河川交通を利用して古墳が伝播していることから、畿内政権にとっても河川交通が重要視されていたことが窺われる。

次に東山道ルートであるが従来から想定されている美濃地域から信濃地域に入るコースのほかに前掲の遠江から天竜川を遡上して諏訪湖に至るコースが想定され、河川交通を利用することで比較

## 第2表　関東地方および周辺地域における受容期の埴輪

| 古墳名 | 墳形 | 規模 | 円筒系 壺形 | 円筒系 器台形 | 円筒系 普通円筒形 | 円筒系 朝顔円筒形 | 円筒系 鰭付円筒形 | スカシ孔 配列 千鳥状 | スカシ孔 配列 多孔 | スカシ孔 形状 巴形 | スカシ孔 形状 方形 | スカシ孔 形状 三角形 | スカシ孔 形状 半円形 | スカシ孔 形状 円形 | スカシ孔 形状 その他 | 突帯断面形態 M字形 | 突帯断面形態 台形 | 突帯断面形態 三角形 | 外面調整 ナデ | 外面調整 タテハデ | 外面調整 A種ヨコ | 外面調整 B種ヨコ | 形象埴輪 | 編年 都出編年 | 編年 川西編年 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 甲斐銚子塚 | 前方後円 | 169 | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | | 2 | | △ | | | B・C | I・II | 木製品 |
| 丸山塚 | 円 | 72 | | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | | 2 | | △ | | 蓋 | C | II | |
| 岡銚子塚 | 前方後円 | 84 | | ○ | ○ | | | | △ | ○ | ○ | △ | | | | ○ | ○ | | 2 | | △ | | | C | II | |
| 松林山 | 前方後円 | 116.4 | | | ○ | ○ | | | ○ | △ | | ○ | | ○ | | | | | 2 | | 1 | | | C | II | |
| 森将軍塚 | 前方後円 | 98 | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | △ | | ○ | | | | | | | ○ | 2 | △ | | 異形 | B | I・II | 擬口縁 |
| 川柳将軍塚陪冢 | 円 | | | | ○ | | | | ○ | | | ○ | | | | | | | 2 | | | | | | II | 擬口縁 |
| 倉賀野浅間山 | 前方後円 | 171.5 | | | ○ | | ○ | | | | | | | | | | | | | | ○ | | ○ | C | II | |
| 庚申塚 | 円 | 45 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | II・III | |
| 大鶴巻 | 前方後円 | 123 | | | ○ | | ○ | | | | | | | | | | | | 2 | | ○ | | | | II | |
| 下佐野大山 | 円 | 60 | | | | | | | | △ | | ○ | | | | | | | 2 | | ○ | | | | II | |
| 下佐野茶臼山 | 帆立 | 60 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | II・III | |
| 下郷天神塚 | 前方後円 | 80 | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | | | ○ | △ | △ | ○ | | | ○ | 2 | | | | | B・C | II | 山陰型 |
| 芝根7号墳 | 前方後円 | 50 | | 宮山・都月 | | | | ○ | | | | ○ | | | | | | ○ | 2 | | | | | A 1 | | |
| 箱石浅間山 | 不整形 | 33×30 | | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | 楯 | B | I・II | |
| 太田八幡山 | 前方後円 | 84 | ○ | | ○ | | | | | | ○ | | | | | ○ | | | 2 | | | | | | I | |
| 朝子塚 | 前方後円 | 123 | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | | 2 | | ○ | | 家楯 | C | I・II | 定形化 |
| 別所茶臼山 | 前方後円 | 168 | | | ○ | | | | | | | | ○ | ○ | △ | ○ | ○ | | 2 | | | △ | | | II・III | |
| 小曽根浅間山 | 前方後円 | 58 | ○ | | ○ | | | | | ○ | △ | △ | | | | | ○ | | 2 | | | | | B・C | I・III | 山陰型 |
| 梵天山 | 前方後円 | 151 | △ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 星神社 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | II | |
| 鏡塚 | 前方後円 | 105.5 | | | ○ | | | | | | ○ | | | | | ○ | | | 2 | | | | 家楯 | B | II | |
| 諏訪神社古墳群 | 埴輪棺 | | | | | | ○ | ○ | | | | ○ | | ○ | | | | | 2 | | | | | | | |
| 長辺寺山 | 前方後円 | 120 | | | ○ | | | | | | | ○ | | | | | | | 2 | | | | | | II | 擬口縁 |
| 舟塚山 | 前方後円 | 182 | | | ○ | ○ | | | ○ | | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | II・III | |
| 上出島2号墳 | 前方後円 | 56 | △ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 規格品 |
| 芦間山 | 前方後円 | 120 | △ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 三之分目大塚山 | 前方後円 | 120 | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | 2 | | | | | | II・III | |
| 西岡32号墳 | 円 | 30 | | | ○ | | | | ○ | | | | | | ○ | | ○ | | 1 | | ○ | | | | II・III | |
| 小金塚 | 円 | 48 | | | ○ | ○ | | | ○ | | | ○ | ○ | △ | | ○ | ○ | | 1・2 | 1・2 | | | | C | II | |
| 雷電山 | 帆立貝形 | 86 | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | △ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | | △ | | III古 | 倒立 |

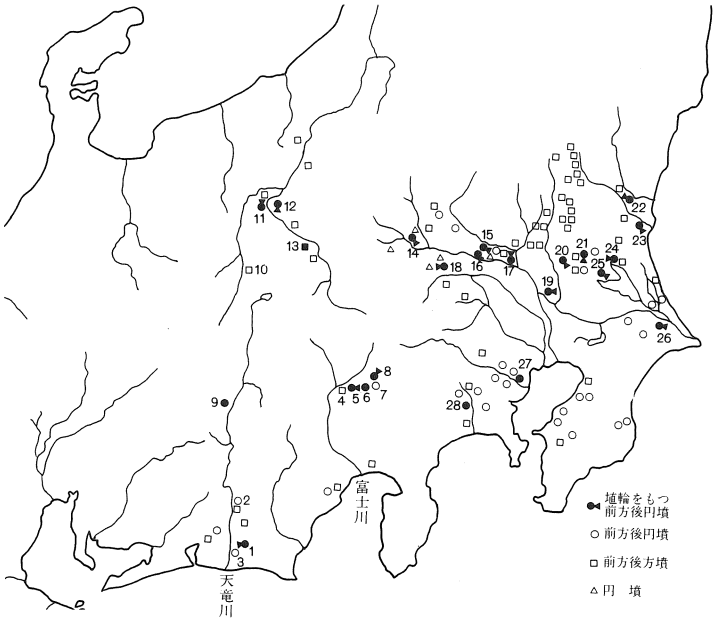
1 倉賀野浅間山古墳
2 下郷天神塚古墳
3 前橋八幡山古墳
4 前橋天神山古墳
5 芝根7号墳
6 別所茶臼山古墳
7 太田八幡山古墳
8 朝子塚古墳
9 藤本観音山古墳
10 小曽根浅間山古墳
11 梵天山古墳
12 鏡塚古墳
13 長辺寺山古墳
14 芦間山
15 舟塚山古墳
16 王塚古墳
17 上出島2号墳
18 三之分目大塚山古墳
19 雷電山古墳
20 高稲荷古墳
21 蓮萊山古墳
22 亀甲山古墳
23 野毛大塚古墳
24 喜多見7号墳
25 稲荷前16号墳
26 観音松古墳
27 加瀬白山古墳
28 秋葉山古墳群
29 瓢箪山古墳
30 地頭山古墳
31 小金塚古墳
32 真土大塚山古墳
33 新皇塚古墳
34 手古塚古墳
35 油殿古墳
36 能満寺古墳

第11図　関東地方における主要前期古墳分布図

的容易に到達することができよう。また信濃地域に至るルートとして日本海沿岸を経由して北陸地方から千曲川を遡上するコースも想定され、甘粕健は善光寺平の前方後方墳が北陸地方の影響下に成立したものと捉えている（甘粕1986）。信濃地域からは碓氷峠を越えて上毛野地域に至り、ここでも2つのコースに別れて、一方は南下して埼玉県の北部へと進み、もう一方は平野部を東進して下毛野地域・那須地域を経由して常陸地域に到達したものと考えられる。

本稿においては、関東地方および周辺地域の古墳出現期を埴輪祭式の受容と前方後円墳の出現以前の段階として捉えている。この段階の首長墓としては前方後方墳を主体に築造され、これに続いて、埴輪祭式を受容している前方後円墳が首長墓として造営されている。前方後方墳と前方後円墳は首長墓の系列としては連続している可能性が高い。前方後円墳から検出されている埴輪の特徴は川西編年Ⅰ期からⅡ期への過渡期のものであり、埴輪祭式の受容は早くとも4世紀後葉を遡らない年代を与えることができる。とするならば、連続する前代の首長墓である前方後方墳の年代は、1世代を20～30年と仮定して、4世紀中葉に求められよう（註15）。このことから関東地方および周辺地域への古墳の波及は西から東へ順次進められたものではなく、比較的短期間に、一気に行われたものといえる。白石太一郎は「吉備などと結んで北部九州勢力の制圧・統制に成功し、朝鮮半島の鉄資源の輸入ルートを確保したヤマトを中心に形成された政治連合に加わることによって、鉄資源や鉄器の安定した入手が保証されるという大きなメリットがあったために」、「畿内以東の広大な地域の首長たちが、きそって初期ヤマト政権に加わった」ものとしている（白石1986）。

古墳出現期における古墳の伝播経路は東海道ルート・東山道ルートを主体として、河川交通を大




第12図　関東地方および周辺地域の主要前期古墳分布図

いに活用して樹枝状に分岐しながら東進している。特に東海道ルートにおいては海岸沿いに古墳が築造されていることから、海上交通も考える必要があろう。では埴輪祭式の波及はどのような経路をたどったのであろうか。関東地方および周辺地域のなかで受容期の埴輪祭式が認められているのは、遠江地域・甲府盆地・信濃善光寺平・上毛野地域である。1段階遅れて常陸地域でも受容されている。これらの地域で埴輪祭式を受容している古墳はすべて前方後円墳であり、南関東地域の円墳は特異な存在といえる。これらのことから、埴輪祭式の波及は遠江地域から天竜川を遡上して信濃地域に到達するコースと、さらに東進して富士川を遡上し、甲府盆地を経由して信濃地域に到達したコースが考えられる。現状の分布からは、どちらかのコースを選択することはたいへん困難である。将来的に天竜川の中流域や富士川流域、また甲府盆地と諏訪湖を結ぶ釜無川流域に受容期の埴輪が検出されることによって、明確になるものといえよう。しかしいずれにしても出現期古墳の伝播によって既に開発されていたコースであり、あえて1つのコースに絞る必要もないと思われる。信濃地域からは碓氷峠を越えて上毛野地域へと東進していったのであろう。ここで問題となるのが畿内的な埴輪の系譜として捉えられない、善光寺平の森将軍塚古墳の存在である。森将軍塚古墳の円筒埴輪の形態は山陰型特殊器台形土器に系譜を辿れるものである。信濃地域に到達した埴輪祭式の波及コースは松本平・佐久平を単に経由したのみで碓氷峠に達した可能性が高いのではないだろうか。もちろん佐久平から善光寺に向かうコースをを否定するものではないが、畿内的な埴輪の製作技法は伝わらずに、埴輪祭式の作法のみが伝わった可能性がある。ここで北陸地方経由で波及してきていた山陰型特殊器台形土器の形態と融合し、さらに在地の土地製作者に作られたがために森将軍塚古墳に示されている独特な形態・製作技法の円筒埴輪が出現したものと想像される。

上毛野地域に到達した埴輪祭式は南西部・南東部地域それぞれに定着し、この段階では下毛野・

常陸地域には波及していない。上毛野では南西部・南東部地域ともに大型前方後方墳が築造されていることから、古墳出現期の段階に地域を代表する大首長が出現している。埴輪祭式を受容したのはこの系列とは異なる前方後円墳に採用され、このなかから大首長が抬頭している。その背後には畿内政権による政治的な影響を想定することができる。古墳出現期にあまりにも強大に成長してしまった南西部地域の前方後方墳大首長の権威を剝奪し、埴輪祭式を受容している首長に権威を継承させたものといえよう。そしてその首長には大型の前方後円墳の築造を認めて、埴輪祭式という畿内と共通の古墳祭祀を執り行わせていったのであろう。畿内政権の干渉によって大首長権が前橋天神山古墳から倉賀野浅間山古墳か大鶴巻古墳に継承されたのであろう。南東部地域では藤本観音山古墳の大首長権の継承を太田八幡山古墳と本矢場薬師塚古墳とで争い、太田八幡山古墳が奪取に成功し、これに続く朝子塚古墳が大首長権を継承したのであろう。埴輪祭式の受容、前方後円墳の築造は畿内政権との関連の深さを物語るものであろう。畿内政権の干渉や大首長権の争奪は考古学的に証明することは困難で、空想として扱われるかもしれない。少なくとも上毛野地域における埴輪祭式の受容に、畿内政権の東国政策が大いに関連していることだけは推定されよう。

関東地方および周辺地域における埴輪祭式の受容は川西編年Ⅰ期・Ⅱ期の過渡期からⅡ期に比定される4世紀後葉頃に、比較的短期間に上毛野地域へと波及している。しかし常陸地域における埴輪祭式の受容は副葬品の検討から5世紀初頭前後に位置付けられるものである。上毛野地域に埴輪祭式の波及が留まったために、常陸地域への到達が遅れたものと考えられる。その波及経路は下毛野地域と房総半島にこの時期の埴輪祭式がみられないことから、上毛野地域から利根川沿いに下毛野地域を迂回しながら東進するコースが推定される。利根川からは霞ヶ浦・桜川・恋瀬川を遡上する経路と、利根川河口から海上交通か陸上交通によって北上して那珂川・久慈川へ到達した経路が考えられる。川西編年では外面調整のB種ヨコハケもしくはA種ヨコハケをこの時期の円筒埴輪の特徴であるのにたいして、常陸地域では二次調整のタテハケが施されている。この現象を、川西宏幸は古い特徴の残存として捉えている（川西1988）。しかし埴輪の特徴からは畿内の直接的な影響のもとに成立したものとはいえず、おそらくは上毛野地域から二次的に波及してきたものであろう。そのために古い特徴である外面二次調整タテハケが施されているものであろう。ここで注目されるのは上毛野地域の朝子塚古墳に続く大首長墓の太田市別所（宝泉）茶臼山古墳（前方後円墳・168m）である。築造年代は常陸地域の埴輪祭式受容期とほぼ併行し、検出されている円筒埴輪の外面調整には二次B種ヨコハケと二次タテハケが施され、その割合はB種ヨコハケが5％にたいして、タテハケが95％を占めている。このことから常陸地域の受容期の埴輪が、上毛野地域のなかでも地理的に近い南東部の影響を強く受けているものといえよう。

南関東地域においては円墳の小金塚古墳によって埴輪祭式が受容されているが、同時期の大首長墓である前方後円墳には採用されていない。小金塚古墳が円墳であることから例外的に捉えるならば、埴輪祭式が東海道ルートによって波及しなかった可能性が高い。駿河地域において、遠江地域の松林山古墳とほぼ併行する静岡市柚木山神古墳（前方後円墳・110m）でも、やはり埴輪祭式が受容されていないことからも推測される。

以上のことから、埴輪祭式の伝播は基本的には東山道ルートによって東進して上毛野地域に到達

し、ここから二次的に常陸地域・北武蔵地域へと波及した経路が推定される。埴輪祭式が畿内政権との関連によって受容されるものであれば、東山道ルート地域と東海道ルート地域において関連の仕方が相違していたことが推測される。この相違は畿内政権による東国政策の違いによるもので、それぞれ関連していた畿内政権内の首長が異なっていた可能性がある。少なくとも、畿内政権の複雑な構造が想定される。一般に畿内政権は大王を頂点とする単純な構造ではなく、有力首長による連合体と捉えられている。さらに筆者は畿内政権を、構成する有力首長のそれぞれの勢力が結集された強大な勢力を保持していた連合体をイメージしている。畿内政権の強大な勢力を後盾にして、構成する有力首長が独自に、もしくは連携して東国政策に携わり、その結果、関東地方および周辺地域の埴輪祭式の受容に大きな影響を与えているものといえよう。また畿内地方においても埴輪の地域性が認められている（註16）。今後、畿内地方の埴輪の分類と、関東地方の各古墳の分析が進んでいくにつれて、古墳時代前期における畿内政権の複雑な構造と関東地方との関係を明らかにすることができよう。

本稿を草するにあたり、多くの方々にお世話になった。記して感謝の意を表わしたい。
京都大学文学部助手　菱田哲郎、静岡県磐田市埋蔵文化財センター、長野県更埴市教育委員会、
長野県長野市立博物館、山梨県埋蔵文化財センター、山梨県八代郡八代町教育委員会
なお、本稿は平成元年度　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究助成の成果である。

（1991.3.20. 脱稿）

註1　埴輪祭式が古墳祭祀のなかの一要素であることから、「祭式」という用語を用いた。

註2　川西宏幸は朝顔形埴輪を含めて円筒埴輪と呼んだ場合、円筒形埴輪という名称を使うのはまぎらわしく、混乱を避けるため「筒形埴輪」と称している。

註3　古川登は墳丘や埋葬施設を囲繞＝多量配列させ、特定の限られた場所の土で作られていないものを円筒形埴輪―埴輪として理解している。一方では埴輪のなかにも供献的に置かれたもののあることを認め（元稲荷古墳例）、埴輪祭式の成立段階のために古い要素を残しているという可能性を示している（古川1988）。しかしこれは古川自身の埴輪の定義とは矛盾するものと思われる。

註4　調整技法は川西宏幸の「円筒埴輪総論」にしたがう（川西1978）。

註5　川西宏幸は畿内各地域における大型古墳の消長から2つの画期を見出し、円筒埴輪編年の0～II期を古墳時代前期としている。この時期の畿内に政治上の結合体が存在したことを想定して、これを前期畿内政権として把握している（川西1981）。

註6　他に畿内地域では奈良県四条古墳・小墓古墳、東海地方では愛知県能田旭古墳（森1989）で確認されている。

註7　静岡県磐田市埋蔵文化財センターのご好意により、実見させていただいた。

討8　小型埋葬施設の基数は山根洋子「更埴市森将軍塚古墳の埴輪について」による（1985）。

註9　突帯数・段数は下から数える。

註10　擬口縁型は各段ごとに成形し、端部は口縁部状に強く外反させる。その各々を接合して埴輪を成形するもので、口縁部状に強く外反させた部分が突帯となる。粘土紐組合型も各段ごとに成形し、接合時に粘土紐を挟み込んで突帯にする。

註11　古代律令制の「国」と合致するものではなく、ある一定の範囲をもった地域として捉えている。

註12　飯塚卓二は古墳出現期から5世紀中葉頃までの首長の系列を南西部地域では前橋八幡山古墳→前橋天神山古墳→大鶴巻古墳→倉賀野浅間山古墳→白石稲荷山古墳、南東部地域では藤本観音山古墳→朝子塚古墳→別所茶臼山古墳→太田天神山古墳と推定している。

註13　川西宏幸は土製品として捉えている（川西1988）。

註14　若松良一は「小金塚古墳の資料は斜ハケ・タテハケ調整が主流であり、横位に近いものも１次調整である場合が多いことから、川西氏のいうＡ種ヨコハケとは認めがたい」ものと批判している(若松他1987)。しかし確認されているナナメハケとは明らかに傾斜角度が異なり、水平方向を意識して施されている。また１次調整であることから川西のいうＡ種ヨコハケとは認められないとするならば、賛同できない。川西は「断続的なヨコハケ」をＡ種ヨコハケと規定し、２次調整に特定していない。「断続的なヨコハケ」と表現したほうが良いのかもしれないが、混同を避けるためにも「Ａ種ヨコハケ」という表現が妥当と考えている。

註15　高橋一夫は東国の前方後方墳・前方後方形低墳丘墓から出土している土器を４期に編年し、第Ⅲ期を布留段階とした。布留期の始まりを西暦300年前後と捉えて、前方後方墳は３世紀末には出現し、４世紀中頃以降は消滅するものとしている。

註16　京都大学文学部助手　菱田哲郎氏の御教示による。

**参考・引用文献**


赤塚次郎　1979　「円筒埴輪製作覚書」『古代学研究』第90号

甘粕　健　1986　「古代文化の形成」『新潟県史通史編１　原始・古代』

甘粕健・久保哲三　1966　「古墳文化の地域的特色　９関東」『日本の考古学Ⅳ　古墳時代上』河出書房新社

飯塚卓二　1986　「埼玉古墳群の出現と毛野地域政権」『研究紀要』第３号　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

石野博信ほか　1976　『纒向』桜井市教育委員会

茨城県　1974　『茨城県史料』考古資料編　古墳時代

1985　『茨城県史』原始古代編

茨城県立歴史館　1990　『特別展　茨城の古墳』茨城県立歴史館

稲村　繁　1983　「茨城県における埴輪の出現―鏡塚古墳の埴輪を中心として―」『古墳文化の新視覚』雄山閣

1984　「墳頂部に配置された埴輪について―方形埴輪列を中心に―」『史学研究集録』第９号

今井　堯　1984　「東京最古の前方後円墳」『遺跡が語る東京の三万年』２　弥生・古墳時代　柏書房

今津節生　1988　『企画展　東国のはにわ』福島県立博物館

岩崎卓也　1988　「古墳追及への一視角」『第２回企画展　前方後円墳の時代―しもつけにおけるその出現と展開―』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館

1989　「古墳分布の拡大」『古代を考える　古墳』吉川弘文館

1990　『古墳の時代』教育社歴史新書＜日本史＞46

梅沢重昭　1978　「群馬県域における初期古墳の成立(1)・(2)」『群馬県史研究』第２・３号

1985　「毛野の埴輪―５世紀代におけるその受容の様相―」『考古学ジャーナル』第253号

1989　「高崎市東南部、倉賀野・佐野地域の古墳形成と発展」『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第11集　下佐野遺跡　Ⅰ地区・寺前地区(2)』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告　第77集

遠藤秀樹　1983　「相模川流域における古墳の展開」『専修史学』第15号

1989　「多摩川流域の古墳の変遷について―田園調布・野毛古墳群を中心に―」『多摩川台古墳羊発掘調査報告書Ⅰ―第３・４・５・６号墳の範囲確認調査―』大田区教育委員会

大田区郷土博物館　1988　『大田区郷土博物館収蔵品目録』考古部門資料目録(1)―西岡秀雄コレクション―

大金宣亮　1987　「那須地方の初期古墳」『第１回企画展　古墳出現期の社会―しもつけの墳墓と集落―』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館

大塚初重・小林三郎・熊野正也編　1989　『日本古墳大辞典』東京堂出版

大橋泰夫・荻悦久・水沼良浩　1984　「常陸長辺寺山古墳の円筒埴輪」『古代』第77号

大森信英ほか　1975　『上出島古墳群』岩井市教育委員会
奥田尚ほか　1984　「吉備形器台・壺の砂礫観察とその産出地」『考古学論功』第10号
川西宏幸　1973　「埴輪研究の課題」『史林』第56巻第４号
1978　「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２号
1981　「前期畿内政権論―古墳時代政治史研究―」『史林』第64巻第５号
1988　『古墳時代政治史序説』塙書房
1990　「埴輪が語る古墳時代の常陸」土浦市立博物館第３回特別展講演会資料
北武蔵古代文化研究所ほか　1985　『第６回三県シンポジウム　埴輪の変遷―普遍性と地域性―』
久保哲三編　1985　「伊勢原市小金塚古墳調査報告」『専修考古学』第２号
久保哲三　1986　「古墳時代における毛野・総」『岩波講座　日本考古学５　文化と地域性』岩波書店
1990　「下毛における古墳出現期の様相」久保哲三編『下野茂原古墳群』（宇都宮市埋蔵文化財調査報告第28集）
車崎正彦　1976　「常陸舟塚山古墳の埴輪」『古代』第59・60合併号
1987　「房総豪族層の動向」『古代』第83号
群馬県　1981　『群馬県史』資料編３　原始・古代３
群馬県立歴史博物館　1979　『開館記念展　群馬のはにわ』
更埴市教育委員会　1981　『森将軍塚古墳―保存整備事業第１年次発掘調査概報―』
1982　『森将軍塚古墳―保存整備事業第２年次発掘調査概報―』
1983　『森将軍塚古墳―保存整備事業第３年次発掘調査概報―』
1984　『森将軍塚古墳―保存整備事業第４年次発掘調査概報―』
1985　『森将軍塚古墳―保存整備事業第５年次発掘調査概報―』
1986　『森将軍塚古墳―保存整備事業第６年次発掘調査概報―』
1987　『森将軍塚古墳―保存整備事業第７年次発掘調査概報―』
1988　『森将軍塚古墳―保存整備事業第８年次発掘調査概報―』
後藤守一ほか　1939　『静岡県磐田郡　松林山古墳発掘調査報告』
小林広和　1986　「東山古墳群」『第４回企画展　古代甲斐国と畿内王権』山梨県立考古博物館
小林行雄　1965　「神功・応神紀の時代」『朝鮮学報』（1976『古墳文化論考』平凡社　に再録）
小森紀男　1990　「関東　栃木」『古墳時代の研究』第11巻　地域の古墳Ⅱ　東日本　雄山閣
小森紀男ほか　1987　『第１回企画展　古墳出現期の社会―しもつけの墳墓と集落―』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
1988　『第２回企画展　前方後円墳の時代―しもつけにおけるその出現と展開―』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
近藤喬一・都出比呂志　1971　「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』第54巻第６号
近藤義郎　1983　『前方後円墳の時代』岩波書店
1985　『日本考古学研究序説』岩波書店
近藤義郎・春成秀爾　1967　「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第３号
埼玉県　1987　『新編　埼玉県史』通史編１　原始・古代
坂本和俊　1990　「関東　東京・埼玉・神奈川」『古墳時代の研究』第11巻　地域の古墳Ⅱ　東日本　雄山閣
坂本美夫　1986　『国指定史跡　銚子塚古墳附丸山塚古墳―保存修理事業第１・２次概報―』山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第10集
1987　「甲斐銚子塚古墳出土の壺形埴輪」『考古学雑誌』第72巻第４号
1988　『国指定史跡　銚子塚古墳附丸山塚古墳―保存整備事業報告書―』山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第35集

佐藤好司　1986　「埴輪について」『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県史編さん室
塩谷　修　1983　「古墳出土の土師器に関する一試輪」『古墳文化の新視覚』雄山閣
1984　「茨城県における前期古墳の変遷」『第５回三県シンポジウム　古墳出現期の地域性』
1985　「茨城県地方における方形周溝墓の出現とその性格」『史学研究収録』第10号
1990　「関東　茨城」『古墳時代の研究』第11巻　地域の古墳Ⅱ　東日本　雄山閣
塩谷　修ほか　1990　『第３回特別展　常陸の埴輪―埴輪が語る古墳時代の常陸―』土浦市立博物館
柴田　稔　1981　「遠江の古墳―磐田原古墳群の発生を中心として―」『歴史公論』第７巻第２号
清水久男　1986　「西岡32号墳の円筒形埴輪」『博物館ノート』41　大田区郷土博物館
下平秀夫　1968　「川柳将軍塚古墳発見の埴輪円筒棺をめぐって」『信濃』第20巻第４号
白石太一郎　1986　「古墳の東国伝播の意味」『第４回企画展　古代甲斐国と畿内王権』山梨県立考古博物館
高橋一夫　1989　「前方後方墳出土土器の研究」『研究紀要』第６号　(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
高橋克壽　1988　「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』第71巻第２号
田口一郎　1981　『元島名将軍塚古墳―前方後方墳の外部施設確認調査―』高崎市文化財調査報告書　第22集　高崎市教育委員会
立木　修　1974　「円筒埴輪の製作技法―長野県森将軍塚古墳の場合―」『古代文化』第26巻第８号
田中秀和　1988　「畿内における蓋形埴輪の検討」『ヒストリア』第118号
千曲川水系古代文化研究所ほか　1984　『第５回三県シンポジウム　古墳出現期の地域性』
東京都教育委員会　1987　『第３回　東京の遺跡展　弥生時代から武蔵国の成立まで』
都出比呂志　1979　「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻第３号
1982　「前期古墳の新古と年代論」『考古学雑誌』第67巻第４号
1987　「前方後円墳成立期の地域性」『埼玉考古』第23号
1991　「大和政権への道―畿内地方から見る―」『第９回　古代史シンポジウム　大和政権への道―出雲・吉備そして大和へ―』全日空・朝日新聞社
中嶋郁夫　1990　「東海　東部（静岡）」『古墳時代の研究』第11巻　地域の古墳Ⅱ　東日本　雄山閣
長野市立博物館　1982　『開館１周年記念特別企画展　はにわの世界』
1983　『第５回企画展　シナノから科野国へ』
日本考古学協会編　1988　『シンポジウム　関東における古墳出現期の諸問題』学生社
沼沢　豊　1990　「関東　千葉」『古墳時代の研究』第11巻　地域の古墳Ⅱ　東日本　雄山閣
橋本澄夫　1981　「北陸の古墳―発生期古墳を中心に―」『歴史公論』第７巻第２号
橋本澄朗　1987　「古墳出現期の社会―小貝川・五行川流域を中心として―」『第１回企画展　古墳出現期の社会―しもつけの墳墓と集落―』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
橋本博文　1976　「東国への初期同筒埴輪波及の一例とその史的位置づけ―群馬県朝子塚古墳採集資料の解釈をめぐって―」『古代』第59・60合併号
1979　「上野東部における首長墓の変遷」『考古学研究』第26巻第２号
1980　「甲斐の円筒埴輪」『丘陵』第８号
1981　「埴輪研究の動静を追って」『歴史公論』第７巻第２号
1987　「埴輪の出現―関東地方の場合―」『季刊　考古学』第20号
1987　「関東の『出現期古墳』とその背景」『東アジアの古代文化』第52号
1988　「埴輪の性格と起源論」『論争・学説　日本の考古学』第５巻古墳時代　雄山閣
巾　隆之　1980　『下郷』関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第１集　群馬県教育委員会
春成秀爾　1977　「埴輪」『地方史マニュアル６　考古資料の見方＜遺物編＞』柏書房
古川　登　1988　「円筒形埴輪の成立」『福井考古学会会誌』第６号
前沢輝政　1977　『山王寺大桝塚古墳』早稲田大学出版会

1987　「古墳出現期の社会―渡良瀬川流域を中心として―」『第１回企画展　古墳出現期の社会―しもつけの墳墓と集落―』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
松木武彦　1990　「蓋形埴輪の変遷と画期―畿内を中心に―」『鳥居前古墳―総括編―』大阪大学文学部考古学研究報告第１冊
右島和夫　1990　「関東　群馬」『古墳時代の研究』第11巻　地域の古墳Ⅱ　東日本　雄山閣
茂木雅博　1987　『墳丘よりみた出現期古墳の研究』雄山閣
望月幹夫・立木修　1983　「相模川流域の古式古墳―伊勢原市小金塚古墳を中心として―」『考古学雑誌』第68巻第３号
森　崇史編　1989　『能田旭古墳―第２次発掘調査報告―(人類学博物館紀要　第11号)』南山大学人類学博物館
森本六爾　1929　『川柳村将軍塚の研究』
矢島宏雄　1990　「中部高地」『古墳時代の研究』第11巻　地域の古墳Ⅱ　東日本　雄山閣
八幡一郎・米山一政・岩崎卓也　1973　『長野県森将軍塚古墳』東京教育大学文学部考古学研究報告Ⅲ
山根洋子　1985　「更埴市森将軍塚古墳の埴輪について」『第６回三県シンポジウム　埴輪の変遷―普遍性と地域性―』
若松良一ほか　1987　『討論　群馬・埼玉の埴輪』あさを社
若松良一・山川守男・金子彰男　1987　『諏訪山33号墳の研究』
和田晴吾　1987　「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34巻第２号

脱稿後、岡山県浦間茶臼山古墳、兵庫県権現山51号墳の報告書が刊行されている。

近藤義郎・新納泉編　1991　『岡山市浦間茶臼山古墳』浦間茶臼山古墳発掘調査団
近藤義郎編　1991　『権現山51号墳』『権現山51号墳』刊行会

研究紀要　第8号

1991

平成3年10月28日　印　刷

平成3年11月1日　発　行

発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01　大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493—39—3955

印　刷　誠美堂印刷株式会社